3．第５次調査の検出遺構と出土遺物（福岡城跡第13次調査／8910）

第5次調査区で検出した古代に属するとみられる土坑は40基がある。第4次調査と異なり、建物遺構を保存した上で、多くの土坑について完掘調査を行っている。第5次調査区は、南半が近世に池（SG51）が造られた際に大きく切り下げられており、多くの遺構が失われたと推定される。また、削平を免れた調査区北半部分にも近世～現代の柱穴や溜め桝、ゴミ穴等が多く、遺構が破壊されている。

土坑ＳＫ５３ Fig.29

第5次調査区北半の中央西寄りに検出した土坑である。風化頁岩の岩盤をくり抜いて設けている。礎石建物SB50の礎石据付穴を切っている。平面形は南北に長い隅丸長方形をなし、非常に整った形状である。南北長2.64mだが、土坑の南半は近世池を造る際に20cmほど削平されており、復元長は2.8m弱である。東西は最大幅1.6m。断面形は逆台形を呈し、最も残りの良い北側部分で深さ80cm。底面は平坦で、南北1.95m×東西0.9mの長方形をなす。土坑の内部には多量の瓦が投棄されており、特に丸瓦は完形品が数点含まれる。対して土師器、須恵器、陶磁器などの土器類は極めて少ない。

SK53のように形状の整った土坑としては第3次調査で検出した土坑SK01等の例がある。このような規格的な遺構については、他の用途のために造られたものが最終的に廃棄物の処理に用いられた可能性が考えられる。

ＳＫ５３出土遺物 Fig.30・31、PL.19

土師器、須恵器、中国産陶磁器（越州窯系青磁）が少量、瓦がコンテナ9箱出土した。

220は土師器椀で、磨滅が著しく調整不明。

221～223は精製の越州窯系青磁である。221は輪花口縁の碗か。外面にヘラ押しで劃線を入れる。222は碗で削り出し高台。全釉で畳付の釉を剥ぎ、白土目が高台内側につく。223は稜花皿で体部にヘラ押しで縦線を施す。全釉で、高台内側に白土目がつく。224は粗製青磁蓋で、口縁に穿孔があり、底部糸切り。釉下に白化粧を施し、口縁から内面に施釉する。

225は軒丸瓦で082B型式。226～228は軒平瓦。226は鴻臚館式（635型式）か。227は662型式。228は515D型式。229は素文磚の小片である。230は平瓦で、凸面に文字銘「伊貴作瓦」のある斜格子目叩きを施す。231は鬼瓦で、左鼻から左顎にかけての部分である。磨滅が著しいがナデ調整か。232～234は丸瓦で、凸面に格子目叩き、内面に布目痕がある。232は長さ38cm（玉縁長5.5cm）、幅17～18.5cmで、小さめの斜格子目叩き。233は長さ38.5cm（玉縁長4.7cm）、幅16～18cmで、やや大きめの斜格子目叩き。234は

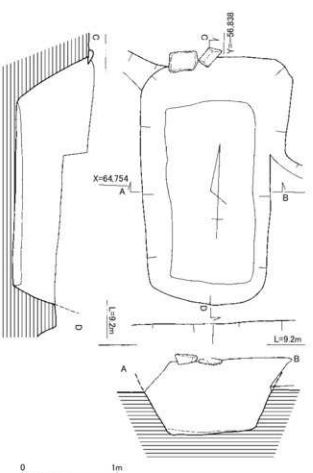


Fig.29 土坑 SK53 実測図（1/40）

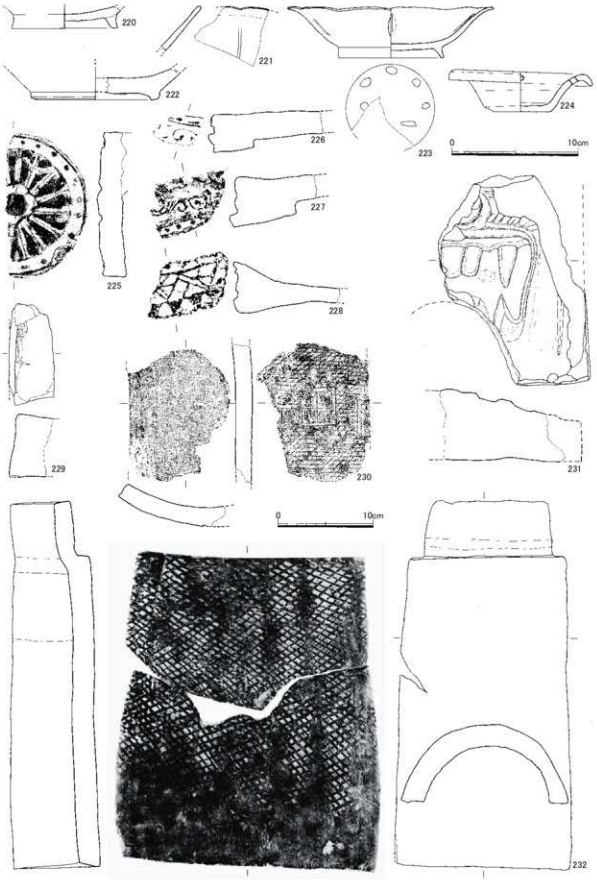
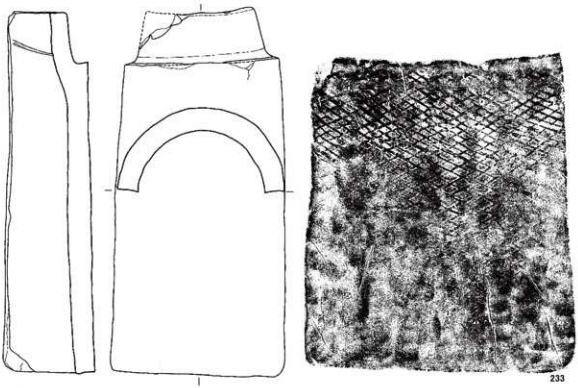


Fig.30 SK53 出土遺物実測図 1（220 ～ 224 は 1/3、他は 1/4）



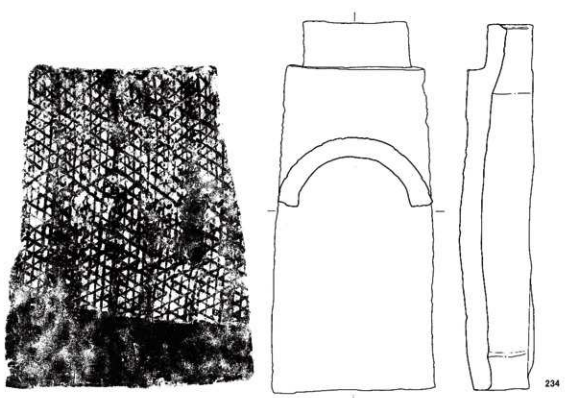


Fig.31 SK53出土遺物実測図2（1/4）

長さ38.7cm（玉縁長4.9cm）、幅15～17cmで、斜格子に平行線を加えた叩き目である。

土器類の出土量が少ないが、北宋前期の越州窯系青磁などより、第Ⅴ期の遺構とみられる。

土坑ＳＫ54　Fig.32

第5次調査区北西部に位置する。風化頁岩岩盤をくり抜いて設けた土坑である。東側に隣接し一部重複する土坑SK61・SK62、及び礎石建物SB31の礎石据付穴を切っており、これらよりも後出の遺構である。西側は近世の攪乱坑に切られている。平面形は整った隅丸長方形で、南北長は現状で2.7m、削平を考慮すると推定2.85mほどとなり、東西幅1.4mである。断面逆台形で、深さは最深部で約80cmがある。底面は南北2.3m×東西0.8mの隅丸長方形を呈し、中央に向かってやや窪む。土坑からは瓦類のほか、陶磁器類が多数出土した。

SK53と規模や形状が近似しており、時期的にも近い関係にあるものと考えられ、SK53と同様、本来は他の目的のために設けられたが、廃棄物の処理に転用された土坑である可能性が強い。

ＳＫ54出土遺物　Fig.33・34

土師器、中国産陶磁器（白磁片、越州窯系青磁、陶器）がコンテナ1箱、瓦が6箱出土した。

235は土師器小皿で高めの高台が付く。全体に磨滅が著しく調整痕は残らない。口径11.0cm、器高1.8cm。**236**は土師器坑で底部ヘラ切り後、高台を貼付する。やはり磨滅が著しい。

237～246は越州窯系青磁である。**237～241**は浙江省産の精製碗である。削り出し高台で全体に施釉し、高台畳付を釉剥ぎする。高台畳付と見込みに白土目又は目跡が整然と並ぶ。238・240は輪花口縁である。**242～245**も碗で、釉下に白化粧を施す一群である。体下半から外底は露胎で、見込みには粗い白土目が付着する。**246**は盤口壷の口縁部片で、内外に施釉する。

247・248は朝鮮半島産の無釉陶器である。**247**は口縁が大きく外反し、やや下方に垂れる。端部を肥厚させ、沈線1条を巡らせる。**248**は頸部で、外面にヘラ描きの波状文を施す。ともに横ナデ調整である。

249は平瓦片である。凸面は縄目叩き、凹面は布目痕を工具でナデ調整する。**250・251**は丸瓦で、歪みがある。**250**は玉縁が欠けるが、瓦本体部分の長さは27.5cm、幅17cm前後で、凸面に正方形に近い斜格子目叩きを施す。**251**は長さ37.2cm（玉縁を除く長さ33cm）、幅17cm前後で、斜格子に平行線を加えた叩き目を施す。

土坑SK61・SK62よりも後出の遺構で、9世紀後半～10世紀後前半の遺構であろう。

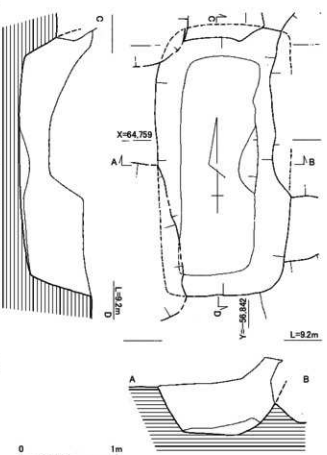


Fig.32　土坑 SK54 実測図（1/40）

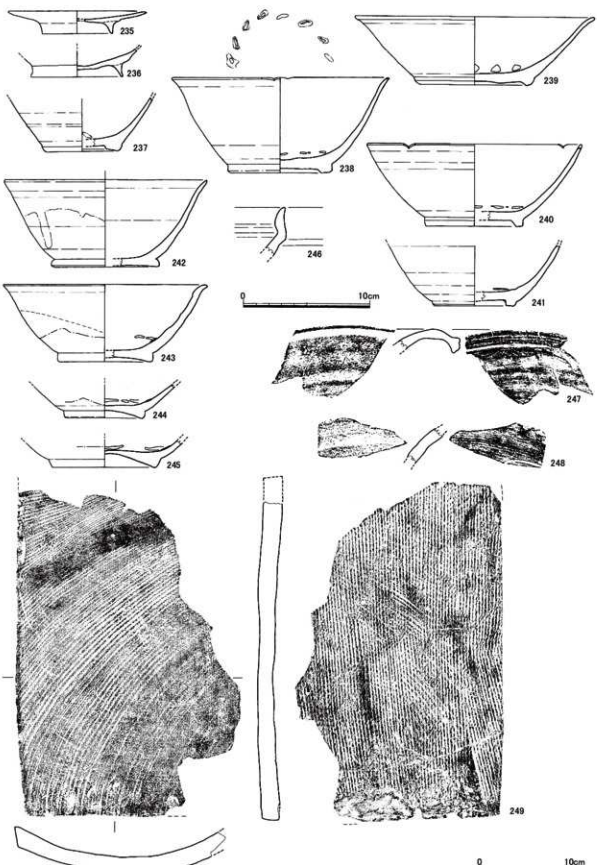


Fig.33 SK54 出土遺物実測図 1（249 は 1/4、他は 1/3）

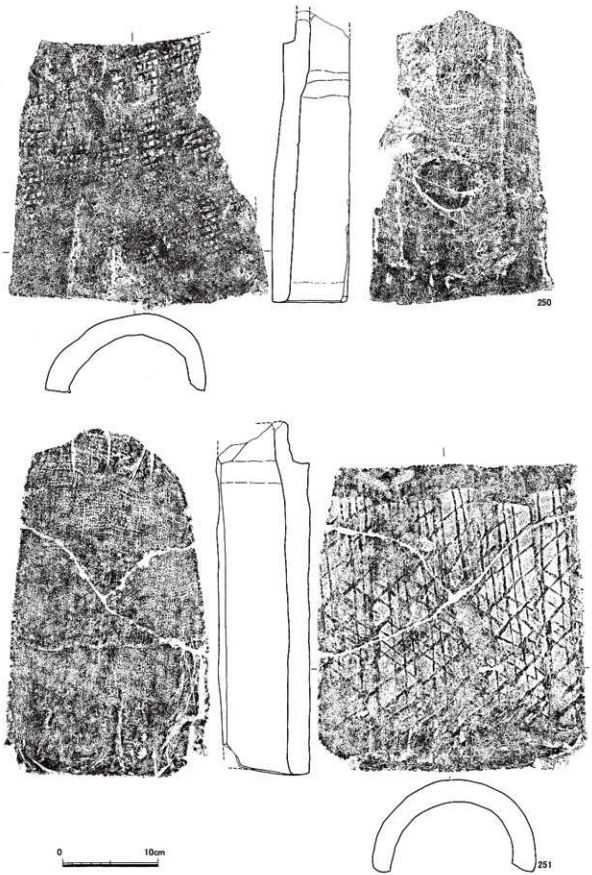


Fig.34 SK54出土遺物実測図2（1/4）

土坑ＳＫ５５ Fig.35、PL.2

第5次調査区北半の中央部に位置する土坑である。北東側を攪乱坑に、南側を近世池SG51に切られる。北側は礎石建物SB50の礎石据付穴と重複し、これを切る。円形プランの浅い皿状の窪みで、東西長2.3m、南北長は2m以上、深さ25cm。底面には幅50cm、深さ10cmの南北方向の浅い溝状の窪みがある。覆土から瓦類を主とする遺物が出土した。

ＳＫ５５出土遺物 Fig.36

土師器、須恵器、中国産陶磁器（景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器が少量、瓦がコンテナ1箱出土した。

252は土師器坏で、底部ヘラ切りである。体部は横ナデ調整。復元口径12.0cm。253は土師器壷で、磨滅して調整痕が残らない。

254～258は景徳鎮窯白磁碗である。254は玉縁口縁で内外施釉。255は口縁が屈曲して短く直立する。内外施釉。256・257は削り出し高台の底部で高台脇から外底は露胎。258は小碗で、体外面下端から外底は露胎となる。

259・260は精製の越州窯系青磁碗の底部で、体部下端から外底は露胎。見込みに白土目、外底端部に目跡がある。

261は福建省産無釉陶器の蓋で、扁平な鉦が付く。

262は胴部小片で、外面に格子目叩き、内面横ナデ調整で、須恵器の可能性が強い。263は軟質で、朝鮮半島産陶器の一部であろう。

第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）の遺構であろう。

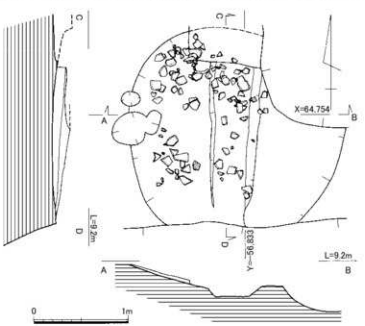


Fig.35 土坑 SK55 実測図 (1/40)

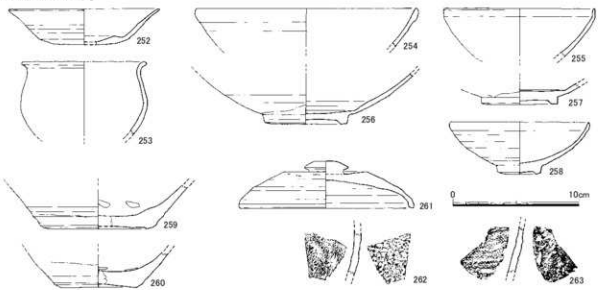


Fig.36 SK55 出土遺物実測図1 (1/3)

土坑ＳＫ５６ Fig.37、巻頭図版4、PL.3

第5次調査区の北西部に位置する。土坑SK84と礎石建物SB31を切り、土坑SK62に切られる。南東側は近世に削平されている。遺構検出時には東西長4.15m、南北長3.85mの不整楕円形プランの土坑と考えて掘り下げたが、結果的に底面が異なる3基の土坑が連なる姿となった。しかしながら、埋土には切り合いを示すような部分は認められず、遺物の出土状況からも分離できないので、一つの土坑として取り扱う。ただし、中央部の大きい土坑（SK56a）が埋まりきる前に北側の土坑（SK56b）を新たに掘り込めば、本遺構のような状況が起こる可能性がある。南側の隅丸長方形の小土坑（SK56c）についても切り合いは認められず、同時に埋没していった状況を示している。中央部の最も深いSK56aは、東西に長い不整な隅丸方

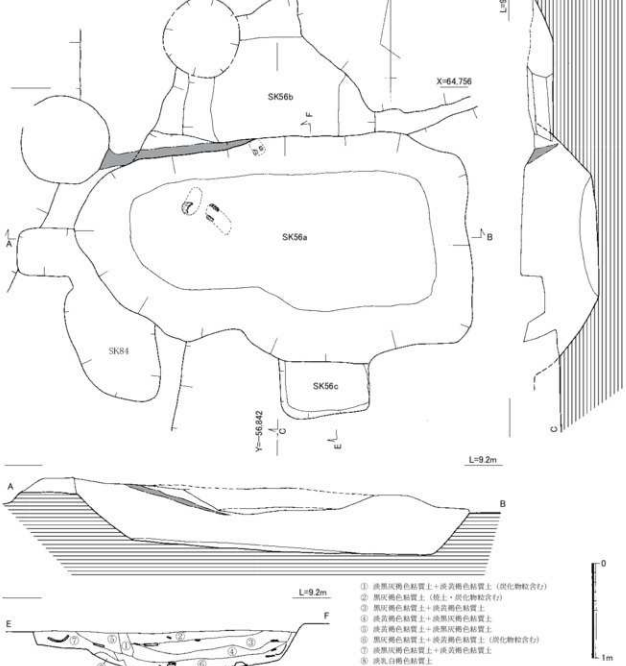


Fig.37 土坑SK56実測図（1/40）

形プランで東西長4.15m、南北長2.4m、深さ80cm。北側のSK56bは残りが悪いが隅丸方形プランとみられ、東西長2.0m、南北長1.5m。深さ40cm、SK56a底面との段差は40cmを測る。SK56cも隅丸方形プランで、東西長0.95m、南北長0.6m、深さは現状で20cmである。

埋土は大きく上下2層に分けられ、上層は赤褐色粘質土層でSK56b全体とSK56a上層に堆積する。下層は黒褐色粘質土層で、SK56c全体とSK56b下層に堆積する土層が相当し、約30cmの層厚がある。

出土遺物は、上層では越州窯系青磁の優品が多く、全てに使用痕が認められる。下層は白土目が残る未使用の青磁で、上層のものと比較すると粗製であり、大部分が二次的な火を受けている。第4次調査のSK38と同様の状態を示す。また、SK56からは食料残滓が多く出土しており、特に下層には馬の頭骨、四肢骨、鹿骨が多く、上・下層から魚骨(マダイ、クロダイ、イワシ等)、炭化米等が出土した。

なお、遺構北壁に地震によって生じたとみられる地割れ(アミ部分)があるが、遺構より古い時代のものである。

ＳＫ５６出土遺物 Fig.38～45 Tab.8、巻頭図版4、PL.19・20

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・定窯系白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、近世陶磁器がコンテナ21箱、瓦が53箱、馬歯等の自然遺物や鉄製品等が2箱出土した。図示できなかった越州窯系青磁については法量表（195ページ）に示した。

264・265 は須恵器坏蓋である。264は天井部がヘラ切り未調整で、復元口径15.0cm。

266～279 は土師器である。**266～270** は坏で、底部ヘラ切り、体部横ナデ調整。口径は順に11.6cm、11.0cm、11.8cm、11.8cm、12.4cm。**271** は高台付き坏で、口径14.2cm。**272～275** は碗で、口径は順に、11.8cm、11.0cm、11.4cm、12.6cm。**276** は大型の碗で、口径20cm。277は脚付き鉢で、内外面を刷毛目調整、底部から脚を横ナデ調整。**278** は壷で、横ナデ調整。**279** は黒色土器A類壷。

280～284 は白磁である。**280・281** は邢窯系の碗で、小さな玉縁口縁で蛇の目高台。全釉で、畳付を釉剥ぎする。**282** は定窯系の稜花口縁皿で、畳付から外底は露胎。**283** は景徳鎮窯とみられる小形鉢で、高台内側は露胎、畳付は釉剥ぎする。内底に白土目がある。**284** は小壷で、全釉で畳付は釉剥ぎ。**285** は長沙窯系の青磁か。碗で、全釉。

286～389 は越州窯系青磁である。うち、**286～352** は浙江省産の精製品の一群である。**286～290** は碗で、底部が蛇の目高台もしくは低く肉厚の輪状高台となる。189を除き全釉で、見込みと畳付に白土目又は目跡がつく。**291～296** は輪状高台の小碗で、全面に施釉し、高台畳付の釉を剥ぎ取る。見込みと畳付に白土目又は目跡がある。292・295・296は五輪花口縁である。**297～310** は輪状高台の碗である。外底まで全釉し、畳付の釉は剥ぎ取る。高台の形状から297～300の一群と、高台が細く畳付に向かって尖り気味の301～310に区分できる。**311～314** は平底の坏である。311は玉縁口縁で外底は露胎、他は口縁が短く屈曲して立ち、全釉。**315** は円盤状高台坏である。内面と体外面下半から外底は露胎で、見込みと外底に細長い目跡が残る。内面には不定方向のナデ調整を加える。釉調、器形等から陶代の製品と考えられる。**316～322** は皿で、輪状高台。全釉で畳付を釉剥ぎする。見込みに目跡が残るものが多い。**323～329** は稜花口縁の皿で、輪状高台の付くものと平底のものがある。いずれも畳付の釉を剥ぎ取り、見込みに目跡がある。**330・331** は小型合子蓋で、330は天井部に毛彫りで施文する。全釉。**332** は小壷蓋。**333～337** は小壷で、333は体部内面が露胎で、他は全釉である。**338** は壷蓋で、宝珠状の鈕が付く。**339・340** は合子蓋。**341・342** は水注で、341は図幅の関係で把手を正面にも描いているが、把手は一つである。ともに胴部の4ヶ所にヘラ押しを加え、内面まで施釉する。**343** は小形水注の注口。**344～349** は壷で、**344** は内面露胎、**345** は図示した内面の部分に釉がかかり、他は全釉である。**347** は四耳壷、**346**も外耳が付くが数は不明。**350・**

351 は鉢で、口縁の2ヶ所に穿孔する。内底に白土目があり、内部に小物を入れて焼成したものとみられる。352 は薬研で無釉、目跡が付く。353・354 は半釉の碗である。見込みに白土目が残る。

355～388は福建省産の釉下に白化粧を施す越州窯系青磁である。355～357は高台内を削って蛇の目高台風とする碗である。358～374は円盤状高台の碗。361～368は小碗で、361・362は口縁が内

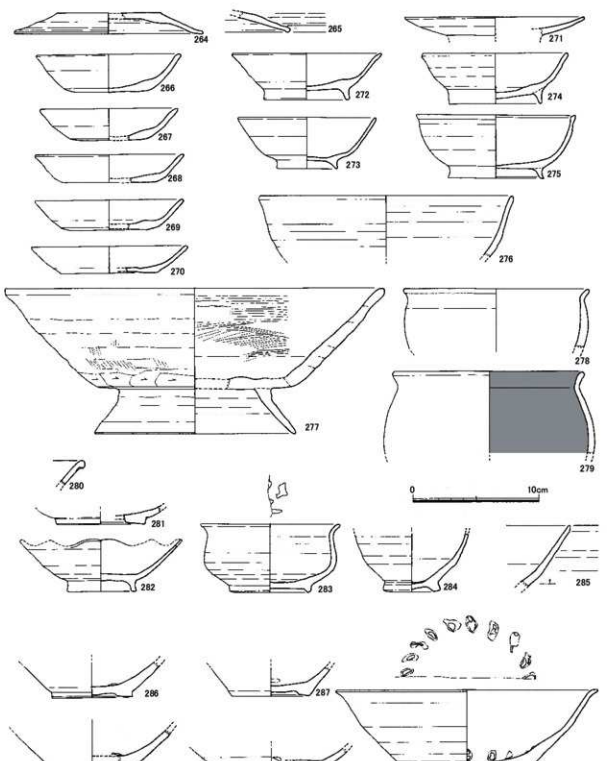


Fig.38 SK56 出土遺物実測図 1 (1/3)

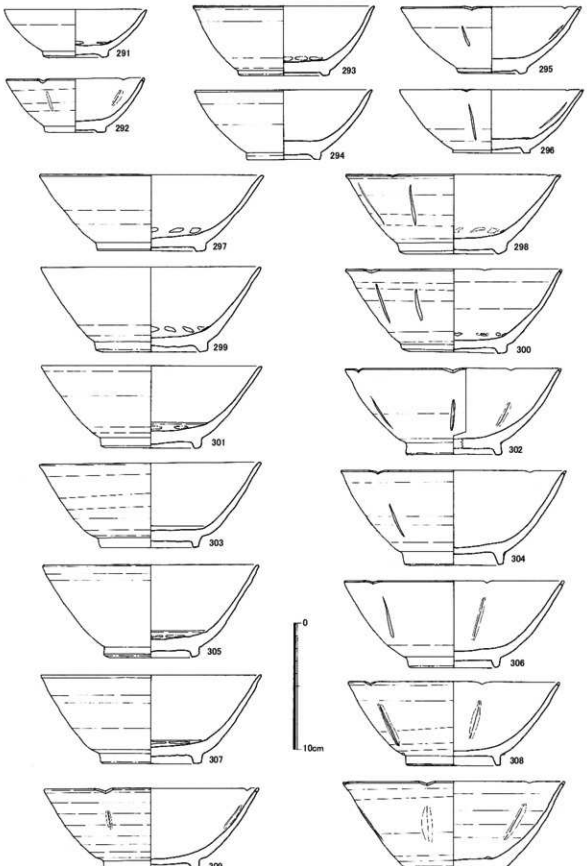


Fig.39 SK56 出土遺物実測図2 (1/3)

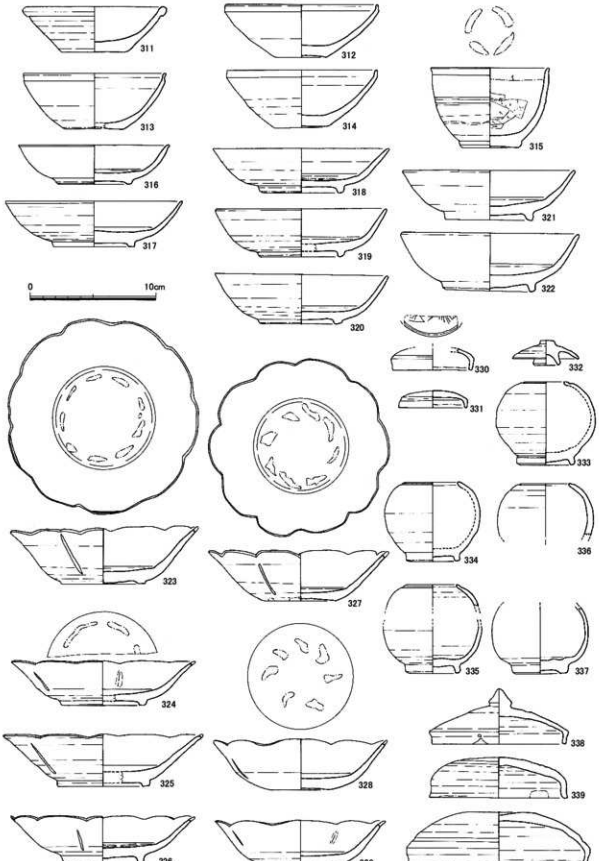


Fig.40 SK56 出土遺物実測図3 (1/3)

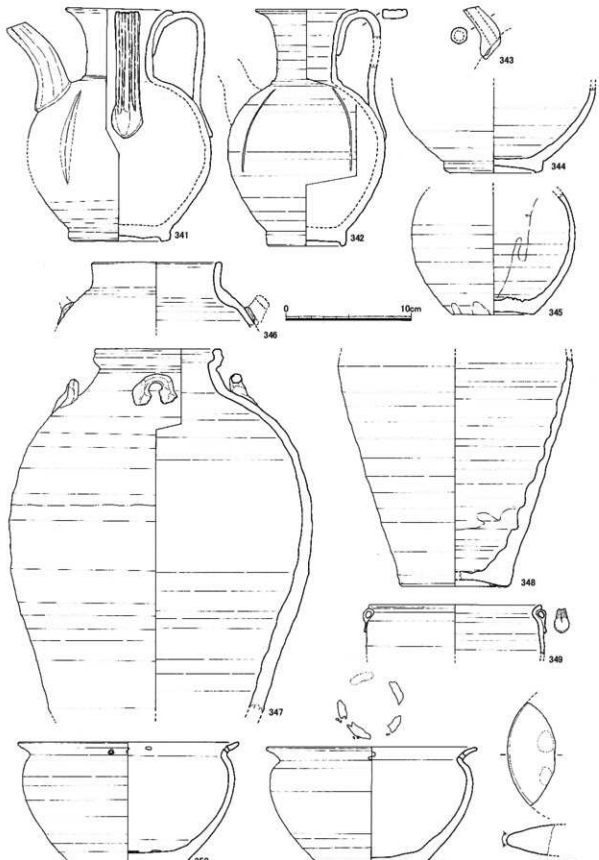


Fig.41 SK56 出土遺物実測図4 (1/3)

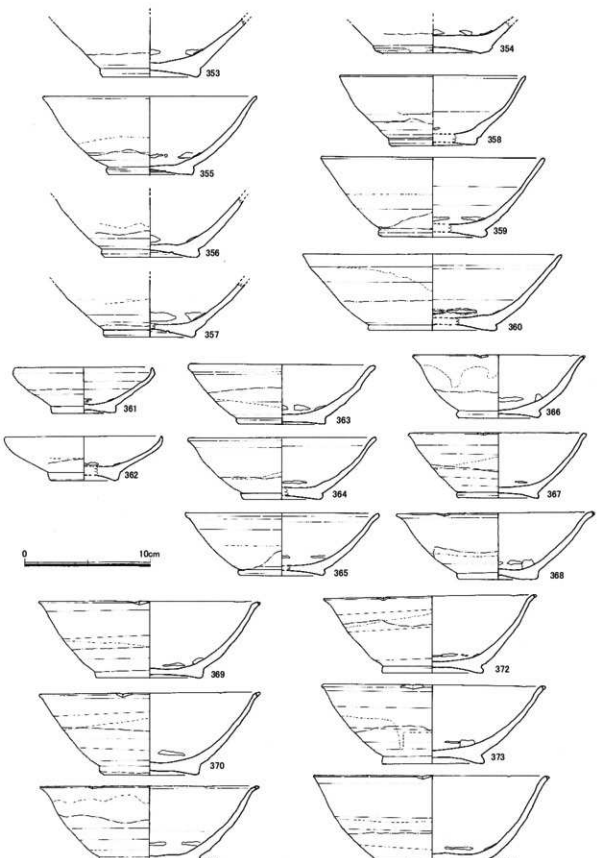


Fig.42 SK56 出土遺物実測図5 (1/3)

湾し、366～368は輪花口縁。369～374は輪花口縁の碗。375～377は輪花皿。368～374は輪花口縁の碗。375～377は輪花皿。378～380は褐彩坏である。355～380の碗・小碗・皿・坏は、全て体外面下半は露胎で見込みに白土目がつく。381は壷蓋で口縁に孔があき、口縁端部から上面に施釉する。382・383は合子蓋で、内面は露胎である。384は合子身で、全釉。385・386は水注、387は壷で、385・387は褐彩を施す。388は大鉢。389は盤口壷で、釉下に白化粧はない。

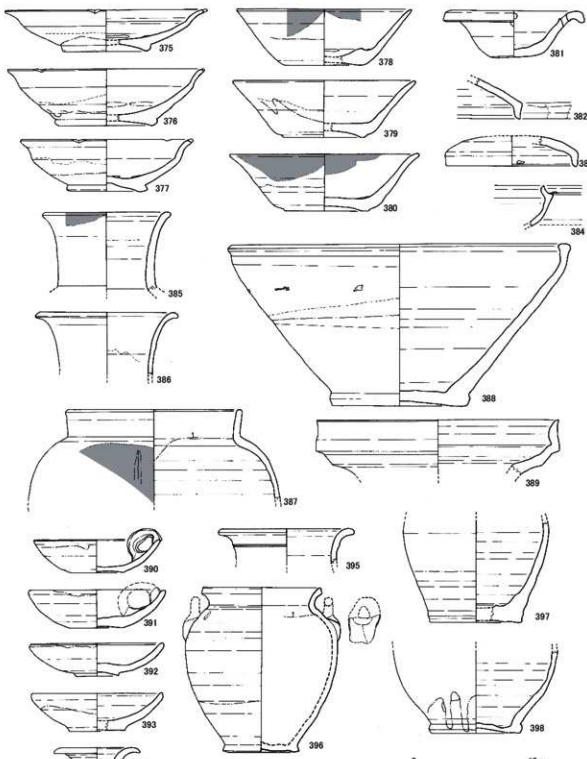


Fig.43 SK56 出土遺物実測図6（1/3）

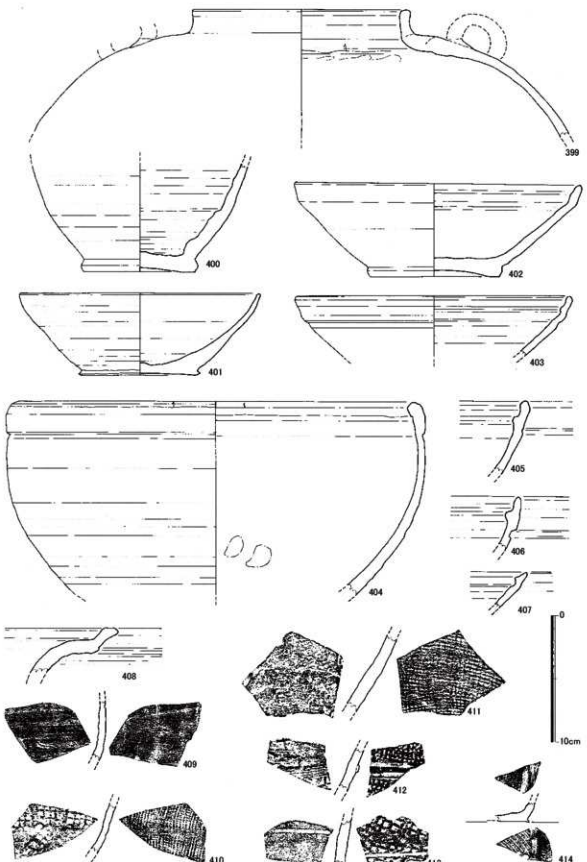


Fig.44 SK56 出土遺物実測図7 (1/3)

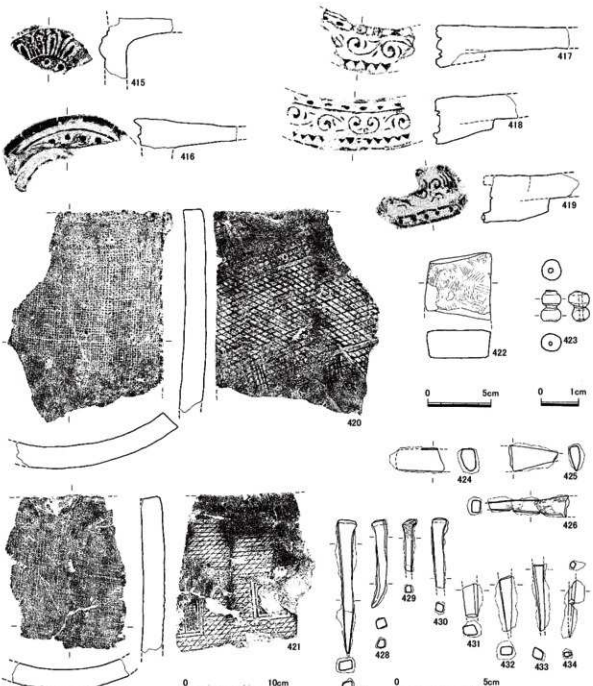


Fig.45 SK56 出土遺物実測図8（423は1/1、424～434は1/2、422は1/3、他は1/4）

390～407は福建省産の陶器類である。390～398は褐釉陶器である。390～393は灯盞で底部糸切り。394は壷蓋、395は水注か。396は双耳壷、397・398は壷類である。399は褐釉耳付壷で、双耳か。400は無釉陶器壷。401～407は無釉陶器捏ね鉢である。

408～414は朝鮮半島産の無釉陶器で、410～413は軟質。408は口縁外面に格子目叩きが僅かに残る。409は内外面横ナデ。410は内外面とも格子目叩きで、内面の叩きは粗い。411は外面が格子目叩き後、横ナデ。412は外面格子目叩きで突線を貼付する。内面は大きい格子目叩きにヘラ削り状のナデを加える。413は外面に粗い格子目叩きを施し、沈線1条が巡る。内面横ナデ。414は底部で糸切り。

415・416は軒丸瓦で鴻臚館式（223型式）か。417・418は軒平瓦で鴻臚館式（635形式）。419も軒平

瓦で662形式。420は平瓦で凸面は単線斜格子目叩き。421は平瓦で「伊貴作瓦」の文字瓦。422は砥石。423は2連鋳式のガラス玉である。424～426は鉄製刀子、427～434は鉄製の釘である。

下層は第Ⅳ期（9世紀後半～10世紀前半）、上層は時期の下る遺物を含む。

土坑ＳＫ５９ Fig.46、PL.4

第5次調査区の南東隅に位置する土坑である。第5次調査区南半部は近世以降に約1mの削平を受けており、SK59は底のみが残った遺構と考えられる。やや南北に長い不整な楕円形プランで、南北長2.55m、東西長2.2m。断面皿状で底面は平坦である。遺構検出面からの深さは約20㎝だが、本来は1m以上の深さがあったものと推定される。

ＳＫ５９出土遺物 Fig.47

土師器、須恵器、国産陶器、中国産陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、近世陶磁器がコンテナ1.5箱、瓦がコンテナ5箱出土したほか、鉄製品がある。

435は猿投窯の灰釉陶器の鉢である。436～445は越州窯系青磁である。436～440は碗で、436は蛇の目高台、437・438は輪状高台である。439・440は粗製の碗で、439は外底に削りを加えて蛇の目高台風にする。共に釉下に白化粧を施す。441は輪状高台の輪花皿で、全釉。442は稜花皿で全釉。443は稜花皿で、釉下に白化粧を施し、体下半は露胎。444は小形合子蓋で全釉。天井部に毛彫り文様がある。445は粗製水注の注口で内面露胎である。446は長沙窯の黄釉褐彩陶器壷類である。447は福建省産無釉陶器捏ね鉢である。448は無釉陶器で、硬質で内外横ナデ調整。外面に沈線5条を巡らす。朝鮮半島産もしくは中国産の可能性もある。449は軒丸瓦で鴻臚館式（223型式）。450は鉄製の庖丁か。

出土遺物が少なく、遺構の詳細時期は不明である。

土坑ＳＫ６０ Fig.46、PL.4

第5次調査区の南東隅、土坑SK59の南東1.5mに位置する。SK59と同様、近世以降に約1mの削平を

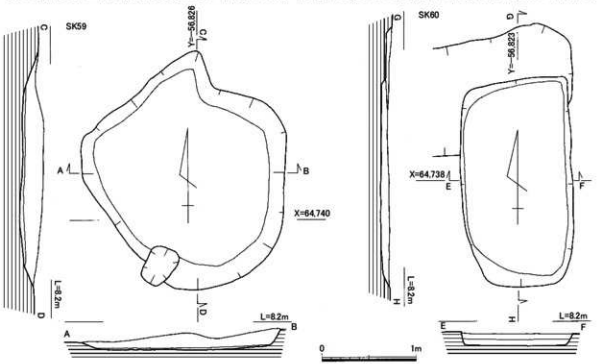


Fig.46 土坑 SK59・60 実測図 (1/40)

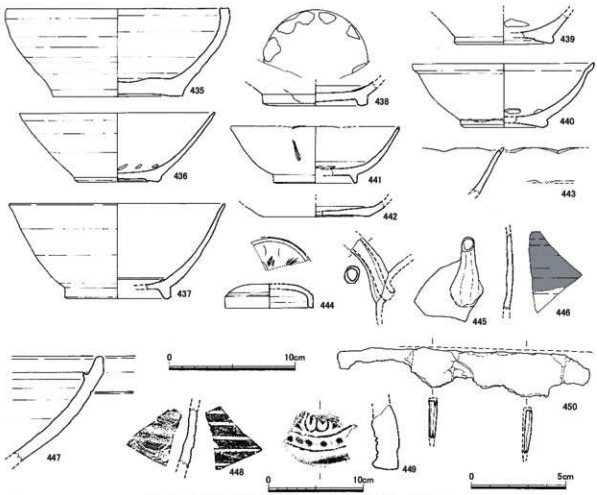


Fig.47 SK59 出土遺物実測図（450 は 1/2、449 は 1/4、他は 1/3）

受けており、底部付近のみが残った土坑であると考えられる。北辺は削平の際に生じたとみられる窪みに更に浅く削られている。南北に長い隅丸長方形プランで、南北長2.2m、東西幅1.2m。断面逆台形状で底面は平坦、遺構検出面からの深さは約10cmだが、削平を考慮すれば本来1m以上の深さを有したものと推定される。本土坑は整った平面形を有し、遺構主軸がSK53・SK54とほぼ同じであるという共通性が窺えることから、単にゴミ捨て用に掘られた土坑ではないと考えられよう。

ＳＫ６０出土遺物

景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、中国産陶器、瓦がコンテナ2箱出土したが、図示できる遺物はない。

土坑ＳＫ６１ Fig.48、巻頭図版5、PL.5

第5次調査区北端部に位置する土坑である。第Ⅱ期布掘り塀SA150、第Ⅲ期礎石建物SB31の礎石据付穴を切る。西辺を土坑SK54に切られ、南東辺はコンクリート溜桝に破壊されている。また北東側に別の土坑SK71が取り付くが、切り合いは不明である。やや南北に長い不整円形プランで、南北長はSK71を含めて3.2m、SK61は2.8m前後か。東西長は2.5m。断面逆台形をなし、深さ60cm。底面は平坦で、東端に一段高い部分がある。南西壁の一部が段をなす。土坑内には近代以降のものとみられる丸太杭が複数打ち込まれている。底面近くからは完形品に近い状態の中国産青磁が約50個体まとまって出土しており、一括廃棄されたものと考えられる。その大半が碗であり、二次的な火を受けている。また、土坑SK56下層出土の陶磁器と接合するものがある。土坑埋土には多量の炭化物が含まれ、食料残滓である獣骨、魚

Fig.48 土坑 SK61 実測図（遺物出土状況図は 1/20、他は 1/40）

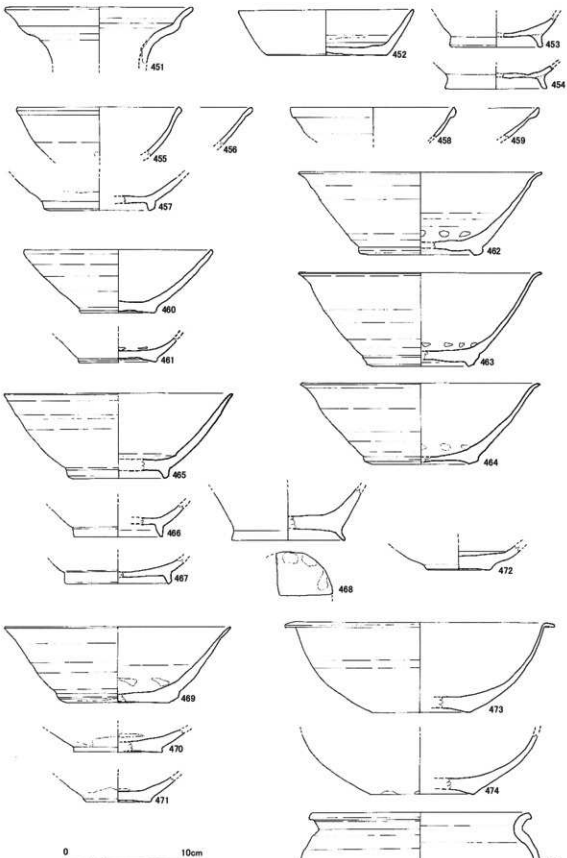


Fig.49 SK61 出土遺物実測図1 (1/3)

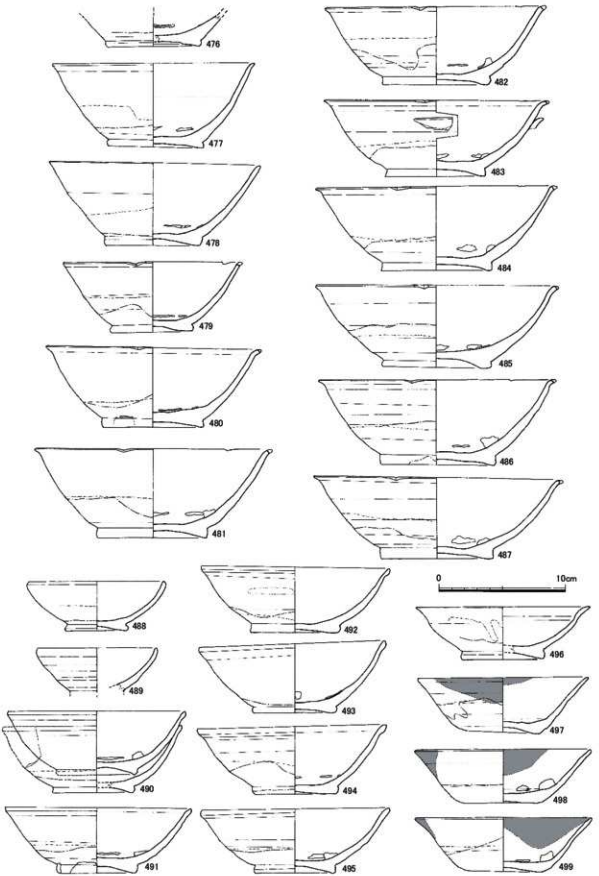


Fig.50 SK61 出土遺物実測図2 (1/3)

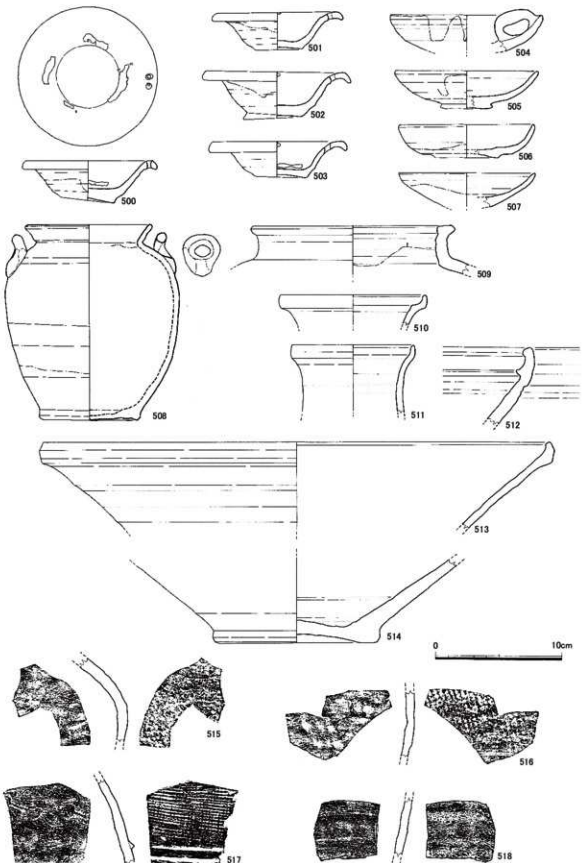


Fig.51 SK61 出土遺物実測図3 (1/3)

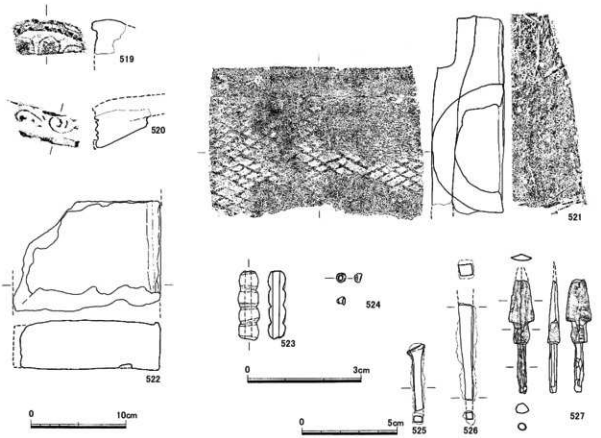


Fig.52 SK61 出土遺物実測図4（523・524は1/1、525～527は1/2、他は1/4）

骨等が出土した。

ＳＫ６１出土遺物 Fig.49～52、Tab.9、巻頭図版5

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器がコンテナ5箱、瓦がコンテナ22箱出土した。越州窯系青磁については法量表（196ページ）に示した。

451は須恵器壷、**452**は須恵器坏である。**453・454**は土師器椀である。

455～459は白磁である。**455～457**は邢窯系の碗で、455・456は小さい玉縁口縁、457は輪状高台にする。高台脇から外底は露胎である。**458・459**は景徳鎮窯の白磁碗で、大きめの玉縁口縁とする。

460～475は精製の越州窯系青磁で、469～471を除き器全体に施釉する。**460～471**は碗である。**460・461**は底部が蛇の目高台となり、全釉で畳付の釉を剥ぐ。461は見込みに白土目が残る。**462～464**は低い削り出し輪状高台で、口縁が外反する。全釉で、見込みに白土目がつく。**465～467**は高台がやや高めで、下方へ尖り気味となる。**468**は底部が肉厚で体部の立ち上がりが急である。全釉で、外底に目跡がつく。**469～471**は平底で、底部下半から外底は露胎となる。469は底部外縁を削っており、他は円盤状の底部をなす。**472**は稜花皿で、全釉。外底外縁を釉剥ぎする。**473・474**は鉢で、全面に施釉し、474は底部外縁に目跡がある。**475**は広口壷である。

476～503は釉下に白化粧を施す粗製の越州窯系青磁で、体部下半から外底は露胎である。福建省産。**476～487**は碗で、底部が円盤状をなす。476は底部に削りを加えて蛇の目高台風にする。**479～487**は輪花口縁である。見込みに粗い白土目が残る。**488～495**は小碗で、488・489は口縁が内湾する小形品である。490～495は口縁が肥厚する。490は焼成時に重ね焼きした2個体の器が熔着してしまったもので、焼成方法よく分かるとともに、本来ならば中国の窯元で廃棄されるべき製品と考えられる。**496**は

皿で口縁が屈曲外反する。497～499は坏で、褐彩を施す。500～503は壺蓋で、口縁に2個1組の孔がある。口縁から内面にかけて施釉する。

504～507は褐釉陶器の灯盞で、504のみ粘土紐を環状にした灯台が残る。いずれも体外面下半は露胎。508は褐釉陶器の双耳壺で、胴部内面及び外面下半から外底は露胎。509は施釉陶器壺で、口縁内面の途中まで施釉する。510～514は福建省産無釉陶器で、510・511は壺、512～514は捏ね鉢。

515～518は朝鮮半島産陶器である。515・516は同一個体の小形壺で、外面格子目叩きで肩部に横ナデ、下半にヘラ削りを加える。内面ナデ調整で、一部に布痕が残る。517は外面に細い格子目叩きにナデを加え突線を貼付する。内面は特異な受け痕が残り、ナデを加える。518は内外面とも横ナデ調整。

519は軒丸瓦の瓦当が剥離した小片で、170A型式。520は軒平瓦の瓦当の顎部分の残欠で、鴻臚館式(635型式)か。521は丸瓦で、凸面に単線斜格子叩き目を施す。522は塼文磚で、やや薄手である。

523は4連鋳式のガラス小玉である。524はガラス小玉である。

525・526は鉄製の釘で、断面方形。525は頭頂部が斜めとなる。527は銅鏃である。先端部分を失う。古墳時代遺物であり、付近にかつて古墳があった可能性を示す。

SK56と接合する出土遺物があり、若干時期が下る遺物が極少量含まれるが、同時期の遺構であろう。

土坑ＳＫ６２ Fig.53、PL.6

第5次調査区の北西部に位置し、礎石建物SB31・50の礎石据付穴・石組排水溝、土坑SK56を切り、土坑SK54に切られる。北東辺は現代の溜桝に破壊されている。やや不整の隅丸方形プランで、南北長2.5m、東西長2.25m。断面逆台形、底面は平坦で南西側が一段深く、最深部で深さ約50cmを測る。

土坑内部には扁平な玄武岩大石と花崗岩小礫が3個ずつ投げ込まれている。玄武岩大石はそれぞれ130cm×85cm×30cm、110cm×80cm×30cm、75cm×60cm×25cmを測り礎石建物に使われていた礎石とみられ、花崗岩の小礫は根固め石と考えられる。礎石建物の基礎を撤去する際に掘られた土坑であろう。

土坑の覆土はSK56やSK61と同様、食物残滓や陶磁器類、瓦類を多量に含んでいる。建物が壊されて

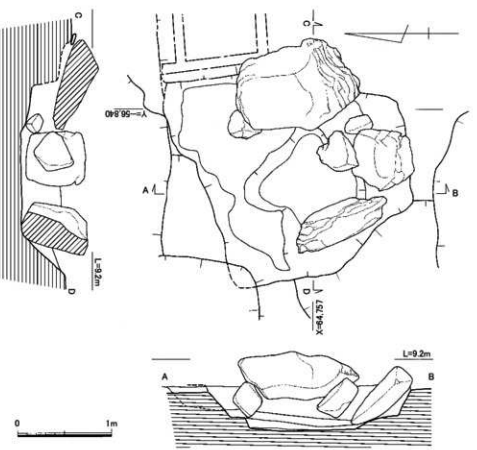


Fig.53 土坑 SK62 実測図 (1/40)

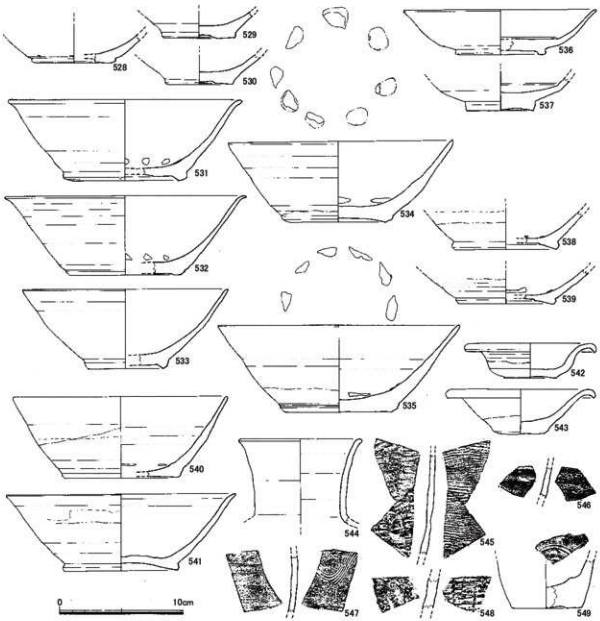


Fig.54 SK62 出土遺物実測図1 (1/3)

間もない時期に掘削されたものと考えられる。

ＳＫ６２出土遺物 Fig.54・55

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器がコンテナ1箱、瓦が25箱、鉄製品1点が出土した。

528は邢窯系の白磁碗で蛇の目高台。高台脇に施釉時に使用した鉗子痕が残る。

529～544は越州窯系青磁である。**529～537**は胎土が密な精製の越州窯系青磁である。**529～535**は碗で、全釉の529～533、体下端以下を露胎とする534・535がある。529・530は蛇の目高台、531～533は低い削り出し輪状高台、534・535は平底である。**536・537**は皿で、全釉。**538～544**は胎土が粗で釉下に白化粧を施し、体下半以下を露胎とする粗製の越州窯系青磁である。**538～541**は碗で、538・539は底部を蛇の目高台風につくる。**542・543**は壺蓋で底部に糸切り痕が残る。**544**は水注の口縁部か。釉下に白化粧がある。

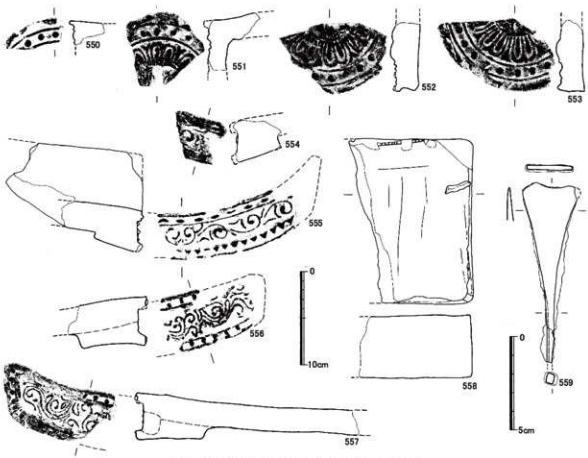


Fig.55 SK62 出土遺物実測図2 (559は 1/2、他は 1/4)

545～**549**は朝鮮半島産の陶器であろう。**545**は外面が平行叩きで、内面の当て具痕はやや異質である。**546**は薄手で、内外面横ナデで黒色顔料を塗る。**547**は内外面横ナデ、外面に櫛描波状文を施す。**548**は外面が長方形の格子目叩きで、内面ナデ調整。**549**は小さな平底で厚手、内外面ナデ調整。

550～**553**は軒丸瓦で、小片だがいずれも鴻臚館式(223形式、553は223a型式)であろう。**554**・**555**は鴻臚館式(635型式)軒平瓦。**556**・**557**も軒平瓦で662型式。**558**は素文磚で幅17.6㎝、厚さ6.7㎝を測る。

559は鉄鏃である。古墳時代の遺物であろう。

9世紀後半～10世紀前半の遺構とみられ、礎石建物の廃絶時期を示そう。

土坑ＳＫ６６ Fig.56、PL.6

第5次調査区の北東隅に検出した瓦溜りである。礎石建物SB330の基壇内に位置しており、SB330より後出の遺構である。北西－南東に長い隅丸長方形プランをなし、北側は調査区壁にかかるが、70㎝幅の未調査区を挟んだ北側の調査区までは伸びていない。従って現状で南北長2.55mであるため、最大でも3.2m以内の遺構と考えられる。東西長は1.0～1.2mである。断面逆台形をなし、底面は平坦で、底面に別の円形土坑のプランが認められたが、この土坑については未調査である。

多量の瓦が出土しており、平瓦の叩き目は斜格子目タタキが大半を占める。

ＳＫ６６出土遺物 Fig.58、PL.20

黒色土器A類、中国産陶磁器(定窯系白磁、越州窯系青磁)、近世染付、瓦等がコンテナ8箱出土。

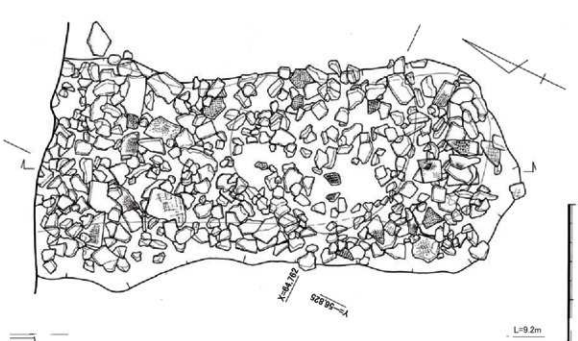


Fig.56 土坑 SK66 実測図 (1/20)

560は定窯系の白磁皿で、体部に白堆線がある。外底は釉剥ぎする。561は越州窯系青磁の皿で、見込みに低い段を設け、低い輪状高台を削り出す。全釉で畳付は釉剥ぎ、見込みに白土目が付く。

562は鉄製の庖丁か。

当遺構より多量に出土した瓦の叩き目文様の分類については、次年度にまとめて報告する。

土坑ＳＫ７２ Fig.57

第5次調査区の北東部に検出した小土坑である。礎石建物SB330の礎石据付穴を切る。円形プランで、径0.73m。断面逆台形で、深さ15cmを測る。底面は平坦である。

ＳＫ７２出土遺物 Fig.58

須恵器、中国産陶磁器(越州窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ1箱出土した。

563は越州窯系青磁碗で、輪状高台を削り出す。全釉で畳付は釉剥ぎ。見込みに目跡がある。564は朝鮮半島産無釉陶器壷の口縁部で、短い頸部の二重口縁で、外面に突線が巡る。内外面横ナデ調整。565は軒丸瓦で鴻臚館式(223型式)。

古代の遺構であるが、出土遺物が少なく、詳細時期は不明である。

土坑ＳＫ７３ Fig.57

第5次調査区の北端中央部に検出した土坑である。布掘り塀SA150、及び礎石建物SB50の北側雨落ち溝を切る。南北に長い隅丸長方形プランで、南北長1.5m、東西最大長1.15m。底面の南側が一段深く、深さ30cm。対する北半は極めて浅く、深さ5cm前後である。覆土上面が粘土で覆われていた。

ＳＫ７３出土遺物 Fig.58

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系白磁、越州窯系青磁)、朝鮮半島産陶器、瓦等がコンテナ2箱

出土した。

566は邢窯系の白磁碗で、輪状高台内は露胎である。畳付は釉剥ぎし、砂粒が付着する。567は朝鮮半島産陶器の底部とみられる破片で、内外面とも横ナデ調整。568は軒丸瓦で082A型式。569は鉄製品で、クサビであろうか。古代の遺構とみられるが、出土遺物が少なく、詳細時期は不明。

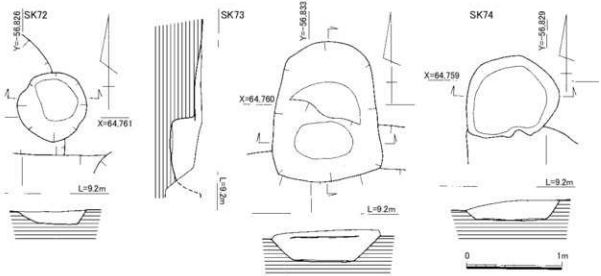


Fig.57 土坑 SK72・73・74 実測図 (1/40)

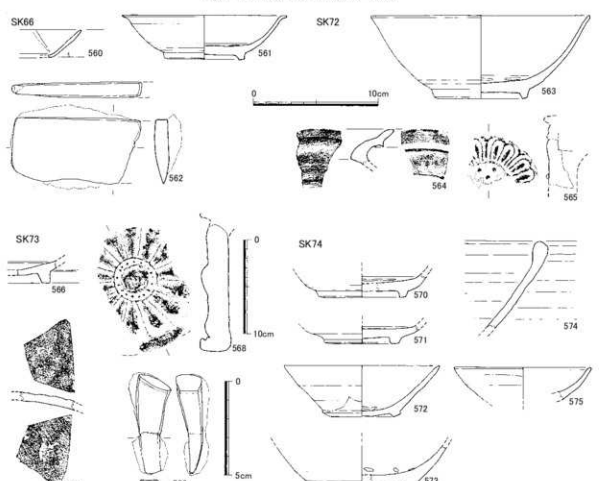


Fig.58 SK66・72・73・74 出土遺物実測図 (562・569は1/2、565・568は1/4、他は1/3)

土坑ＳＫ７４ Fig.57

第5次調査区の北東部に位置する土坑である。礎石建物SB50の礎石据付穴、土坑SK75を切っている。やや東西に長い楕円形プランで、東西長1.0m、南北長0.85m。断面逆台形で、深さ20㎝、底面は平坦である。

ＳＫ７４出土遺物 Fig.58

土師器、須恵器、国産陶器、中国産陶磁器(越州窯系青磁、陶器)、瓦がコンテナ1箱出土した。

570は篠窯産須恵器鉢で、内外面横ナデ調整。571～574は越州窯系青磁碗である。いずれも輪状高台で、573を除き全釉で畳付を釉剥ぎする。573は高台脇以下を露胎とする。見込みに目跡又は白土目が残る。575は褐釉陶器の灯盞である。口縁下から外底は露胎である。

古代の遺構とみられるが、出土遺物が少なく、詳細時期は明らかにしがたい。

土坑ＳＫ７５ Fig.59、巻頭図版6、PL.7

第5次調査区の北東部に検出した大型の土坑である。布掘り塀SA150と重複し、布掘りの掘り方の一部を壁に利用している。北側では土坑SK92・93、及び礎石建物SB330の礎石据付穴2基を切っている。南側では土坑SK74に切られ、近世の攪乱坑2基に破壊されている。また、土層図には上面から切り込むピットが認められるが、平面では検出困難であった。東西に長い不整な楕円形プランをなし、東西長5.5m、東西最大長2.4mを測る。断面形は概ね逆台形だが底面が平坦でなく、特に布掘り塀の壁を利用した東半部分が下がっている。土層図に示すとおり、埋土は概ね自然堆積の状況を示すが、基盤土である風化頁岩を掘り起こしたほぐし土を主体とする①b、③、⑦層などは明らかに人為的な埋め土であり、一定期間ゴミ捨て穴として使用された後、上層部が一気に埋められた可能性が強い。土坑内からは瓦類、土器類のほか、馬歯などの獣骨、炭化物などが出土した。また、土坑底面に堆積した⑩層や⑰層からも中国製青磁が出土している。

ＳＫ７５出土遺物 Fig.60～65、Tab.11、巻頭図版6、PL.20

土師器、須恵器、中国産陶磁器(邢窯系・定窯系白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器、明代青花)、朝鮮半島産陶器がコンテナ13箱、瓦が67箱、馬歯骨等の自然遺物金属製品等が5箱出土した。図示できなかった越州窯系青磁については法量表(197ページ)に示した。

577は須恵器壷の底部で、削り後外面に格子目叩き、内面に半円文の当て具痕が残る。578は土師器甕で胴部下半外面に格子目叩き、内面ナデ、口縁横ナデ調整。外面に煤が付着する。579は土師器坏で底部ヘラ切り。口縁端部が変色しており油煙か。口径12.0㎝、器高2.7㎝。580～583は土師器椀で、底部をヘラ切りし、高めの高台を貼付する。584・585は黒色土器A類の椀。586は国産緑釉陶器の碗で、全面に施釉する。

587～589は邢窯系の白磁碗で、587は小さな玉縁口縁、588は蛇の目高台で、畳付から外底は露胎、589は輪花口縁で体部に白掻線を入れる。590・591は定窯系の白磁。590は穂花坏で、外底は釉剥ぎする。591は碗で、畳付は釉剥ぎする。593～595は景徳鎮窯の白磁碗で、593は大きな玉縁口縁である。596～598は華北産白釉緑彩陶器の碗である。白色系で精良な陶胎に、乳白色の半透明釉をかけ、緑釉の点彩を加える。596は釉が剥落するが、外底に緑釉の痕跡が残る。

599～682は越州窯系青磁である。599は隋代と思われる坏で、外面口縁下と体外中位に沈線が巡る。SK56からも同類のものが出土。口縁内面から体部外面下端まで施釉する。以下655までは浙江省産の精製越州窯系青磁で、碗・皿においては一部を除き全釉で、一般に高台畳付は釉剥ぎする。600～604は蛇の目高台の碗である。605・606は小碗で、低く肉厚の輪状高台である。607～610は碗で、高台形

状は605等に同じ。見込みの目跡は整然と並ぶ。611～616は小碗で、高台がやや高い。615は輪花口縁である。617～620は碗で、高台形状は611等と同じ。616・617は輪花口縁である。621～627は高台が更に細く、下端へ細る碗である。625～627は輪花口縁である。628は先細りの細い高台の碗で、外底に目跡が付く。629～631は坏で、630・631は玉縁状口縁。632・633は輪花皿、634・639・640は稜花皿、635～638は皿で、いずれも全釉。641は体部下半から外底を露胎とする皿である。642は小型合子蓋。643は壺蓋。644～647は小壺で、645はケンディ形水注の注口の可能性もある。648～650は水注の口縁部で、650は直に立つ。651・652は鉢で全釉。651は口縁上面は釉剥ぎで目跡があり、652は内底に目跡が付く。653・654は双耳広口壺、655は水注で、ともに全釉である。

656～659は長沙窯製品である。656～658は青磁碗で、656・656は外底中央を雑に削り出す。いずれ

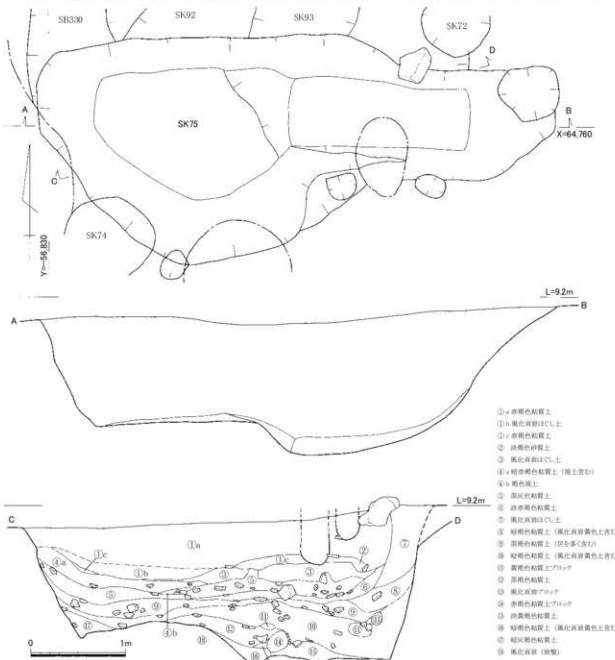


Fig.59 土坑 SK75 実測図（1/40）

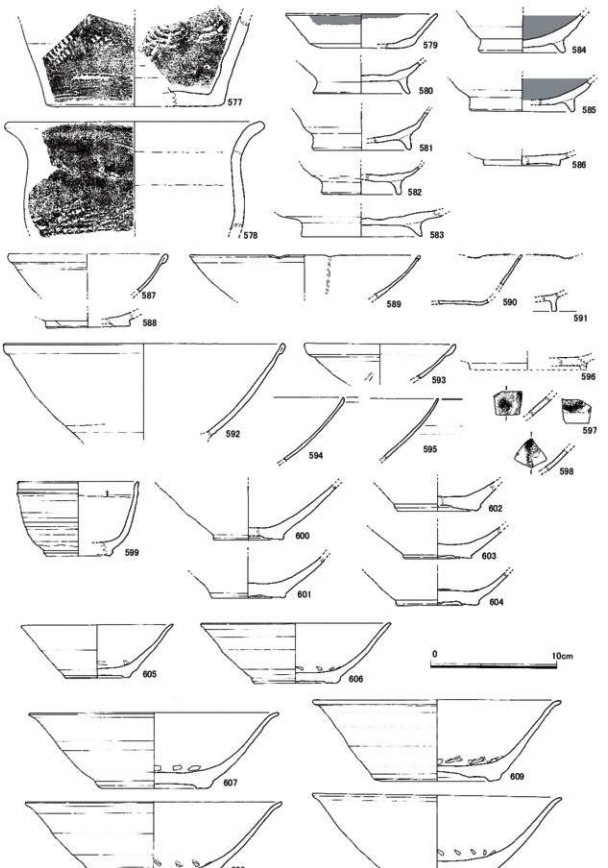


Fig.60 SK75 出土遺物実測図1 (1/3)

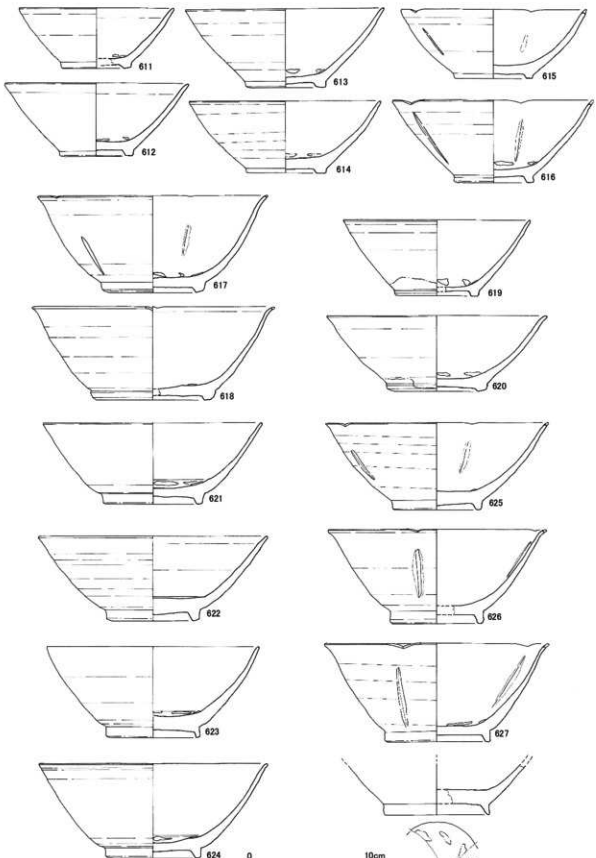


Fig.61 SK75 出土遺物実測図2 (1/3)

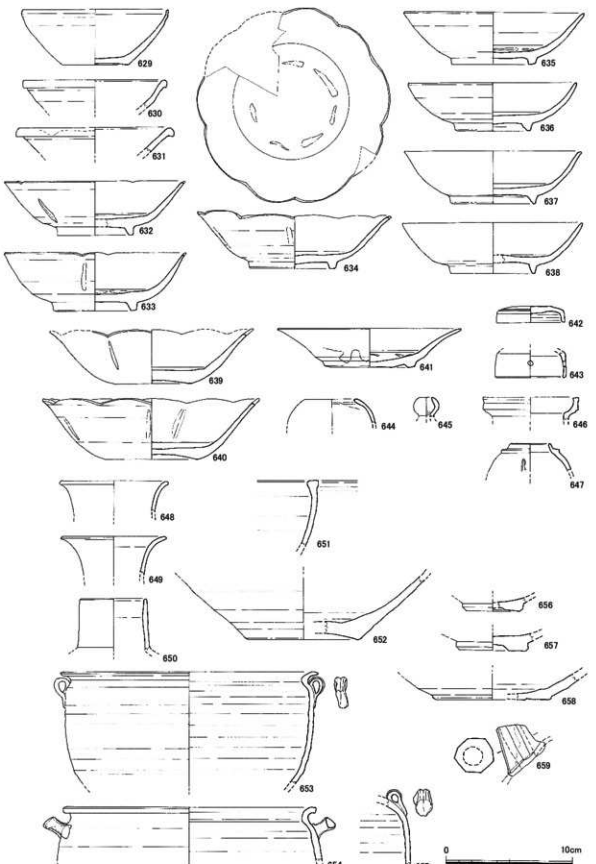


Fig.62 SK75 出土遺物実測図3 (1/3)

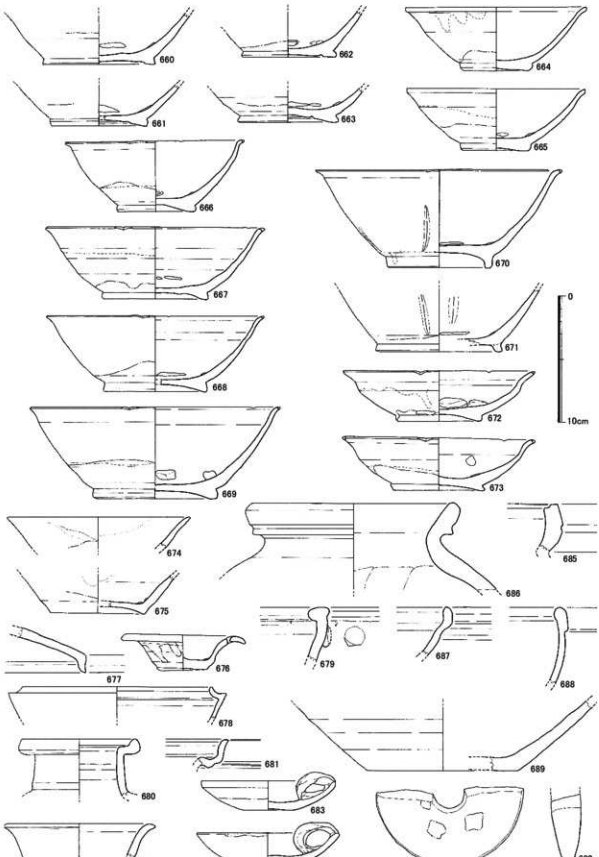


Fig.63 SK75 出土遺物実測図4 (1/3)

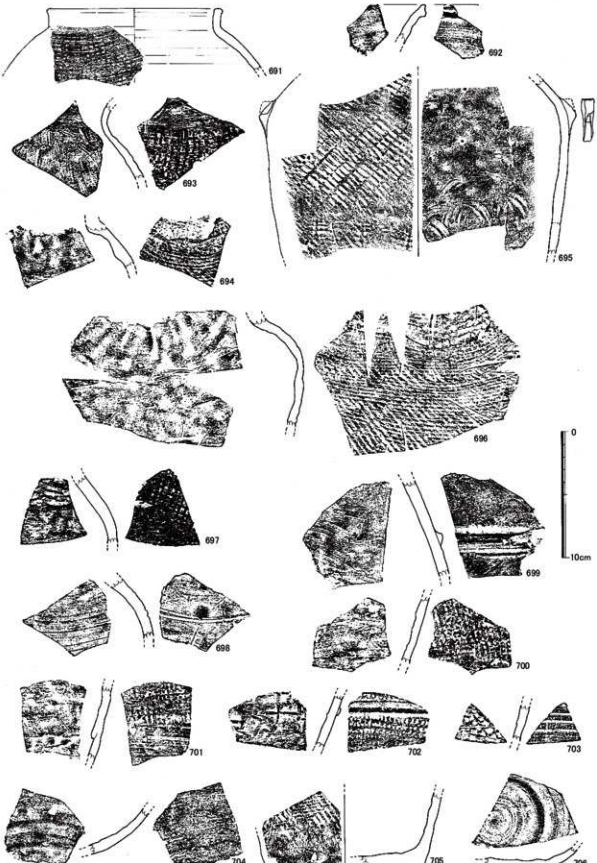


Fig.64 SK75 出土遺物実測図5 (1/3)

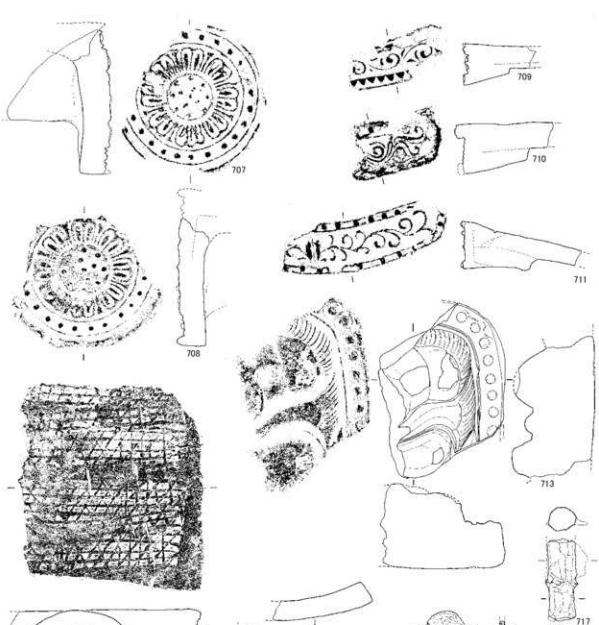


Fig.65 SK75 出土遺物実測図6（716～718は1/2、他は1/4）

も体外面から外底は露胎である。659は黄釉褐彩の水注である。

660～682は福建省産の粗製の越州窯系青磁で、釉下に白化粧を施し、碗・皿類においては体下半から外底を露胎とする。660～663は碗で、外底に削りを入れて蛇の目高台風につくる。664・665は玉縁状口縁の小碗である。666～669は輪花口縁の碗で、670・671は貼付輪状高台。669の内底の白土目上面には上に重ねた器の高台痕が残る。672・673は輪花皿である。見込みに粗い白土目が付着する。674・675は褐彩坏で、675は内底に白土目がつく。676は壺蓋で、体外面から外底は露胎。677は合子

蓋で内面露胎、同じく678は合子身で受け部に目跡がある。679は大鉢の口縁部小片で、外耳の一部が残る。口縁端部を釉剥ぎし、目跡が付く。680・681は盤口壷で、口縁の内側まで施釉する。釉下の白化粧がない。682は壷で、口縁端部に目跡がつく。

683・684は褐釉陶器の灯蓋である。底部糸切りで、体外面下半から外底は露胎である。685は施釉陶器で、口縁外面に施釉する。686～689は福建省産無釉陶器。686は壷で体内面に指押え痕が残り、外面は板状工具によるナデ調整。687～689は捏ね鉢である。690は陶器の薬研(茶碾輪)で目跡がつく。

691～706は朝鮮半島産の無釉陶器で、壷もしくは甕の破片である。691・692は口縁部、693～699は肩部から胴部上半、700～703は胴部下半、704～706は底部周辺の破片である。胴部外面に施された叩き目の種類は691・693・697・700～702が格子目、695が長方形の格子目、694・696・705が平行叩きで、703は内面に格子目叩きがある。695は縦の外耳(双耳か)がつき、699・702は外面に突線1条がつき、698・703は多条の沈線をまわす。704は須恵器の可能性がある。

707・708は軒丸瓦でともに鴻臚館式(223a型式)。709～711は軒平瓦で、709は鴻臚館式(635型式)、710は662型式、711は663型式。712は丸瓦片で、凸面に単線斜格子目に平行線を加えた叩き目(5B)を施す。713は鬼瓦で、左目から左頭部分の破片である。714は平瓦で「伊貴作瓦」の文字瓦。

715は土製品の玉で遊具か。716・717は銅製品で腐食が著しい。716は古墳時代銅鏃の可能性がある。717は容器の脚もしくは把手の可能性がある。718は金箔をまき込んだガラス小玉である。

若干時期の下る遺物が極く少量含まれるが、土師器坏などより、第Ⅳ期(9世紀後半～10世紀前半)に位置づけられる遺構である。

土坑ＳＫ７６ Fig.66

第5次調査区の北端中央部に検出した土坑である。SK75の北側に位置し、礎石建物SB330の礎石据付穴を切っている。南北に長い隅丸長方形プランとみられ、北側は調査区外に伸び、現状で南北長1.5m、東西長0.6mである。横断面形は逆台形で、深さ15cmを測る。

ＳＫ７６出土遺物 Fig.67

土器類は越州窯系青磁・中国陶器が3点出土したのみである。他に瓦が極く少量ある。

719は軒丸瓦で、鴻臚館式(635型式)である。720は中国無釉陶器の薬研である。

土坑ＳＫ７８ Fig.66

第5次調査区の西端に検出した。近世のゴミ捨て穴SK52により大半が破壊され、その落ち際に僅かに残った遺構である。平面形状から2基の土坑の重複とみられるが、切り合い等は不明である。北側の土坑は隅丸方形プランとみられ、現状で南北長2.2m、東西長1.0m、深さ30cm。断面逆台形で底面は平坦である。南側の土坑は断片に過ぎず、平面形は不明。南北1.5m以上の規模とみられ、深さ25cm以上となろう。

ＳＫ７８出土遺物 Fig.67

出土遺物は図示した土器1点である。

721は朝鮮半島産の無釉陶器で、壷の肩部とみられる。外面に平行叩き後横ナデ調整、内面は指押え痕にナデ調整を加える。

土坑ＳＫ７９ Fig. 66

SK78と同様、近世ゴミ捨て穴SK52により大半が破壊された土坑とみられる遺構である。SK78と近世ゴ

ミ捨て穴を挟んだ対面にある。遺構の上端のみが残り、底面が全く失われているが、隅丸方形プランの土坑であったと考えられる。現状で南北2.3m、深さは30㎝以上となろう。

須恵器甕小片1点と、瓦類コンテナ1箱が出土したが、図示できる遺物はない。

土坑ＳＫ８１ Fig. 66

第5次調査区の北東部に検出した土坑である。土坑SK87・93と切り合うが、先後は不明確。東西に長い不整な楕円形プランで、東西長2.45m、南北長1.0m。底面東側が一段浅く、別の土坑が重複している可能性もある。最深部で深さ30㎝を測る。

ＳＫ８１出土遺物 Fig.67

土師器、中国産陶磁器(越州窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ2箱出土した。

722は朝鮮半島産の無釉陶器壷の口縁部である。内面に自然釉がかかる。**723**は丸瓦で凸面に細かい単線斜格子目叩き(3Aa1-1)を施す。SK104出土丸瓦(Fig.94-966)と同じ叩き目で同色・同質である。**724**は軒平瓦で鴻臚館式(635型式)である。

土器類の出土が少なく、詳細時期は明らかにしがたい。

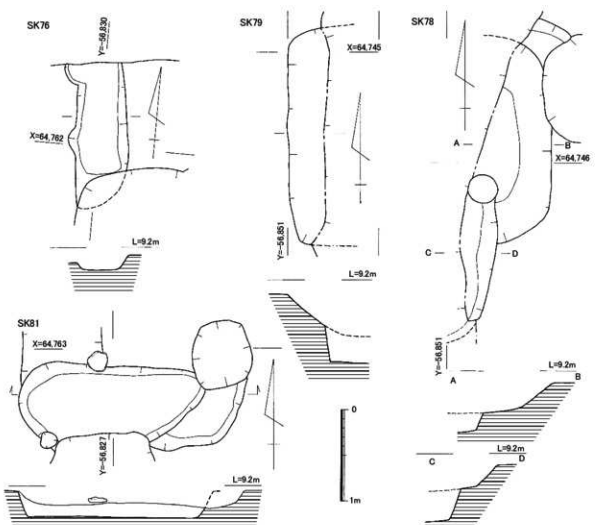


Fig.66 土坑 SK76・78・79・81 実測図 (1/40)

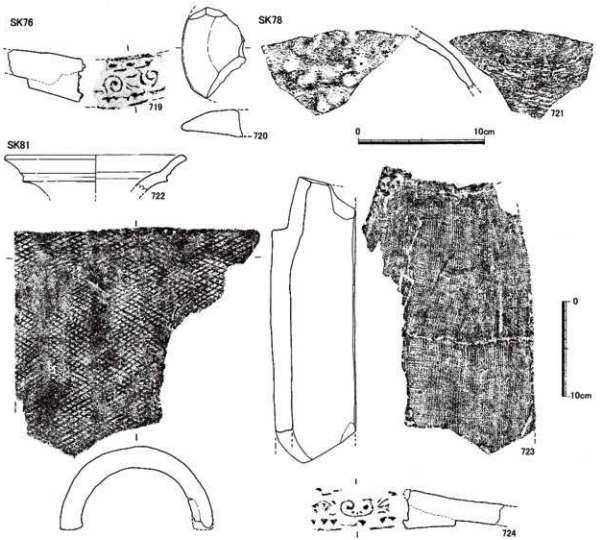


Fig.67 SK76・78・81 出土遺物実測図（720～722は1/3、他は1/4）

土坑ＳＫ８０ Fig.68、巻頭図版7、PL.8

第5次調査区の北東隅に検出した溝状の土坑である。礎石建物SB330基壇と重複する位置にあるが、SB330関連遺構との直接の切り合いはない。南北長5.5m以上×東西幅0.7mの溝状の土坑SK86（後述）と、南北長3.0m×東西長1.3mの楕円形プランの土坑が切り合う状況をしめすが、覆土に明確な切り合いは認められず、また溝状土坑底面から土坑底面にかけて連続して一括遺物である中国産陶磁器が広がって出土することから、一連の遺構であると考えられる。ただし、溝状土坑SK86が最初に掘削され、それがまだ使用中であるか、または埋まりきらないうちに土坑SK80がSK86の掘り込みを利用しながら掘削され、中国産陶磁器を一括廃棄した、という流れも想定可能であろう。いずれにせよ、溝状土坑SK86と土坑SK80の間には、大きな時期的隔たりはないものと考えられる。土坑内からは、主に完形品に近い中国産青磁の碗や皿約200個体が、数個体ずつ重なった状態で出土した。青磁碗や青磁皿は、同一様式のもので占められ、いずれの青磁も目土が残る未使用品であり、かつ大部分は二次的な火を受けている。同様な出土状況は土坑SK38、SK56下層、SK61でもみられる。

ＳＫ８０出土遺物 Fig.69～71、Tab.12、巻頭図版7

須恵器、土師器、中国産陶磁器（邢窯系・定窯系白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産

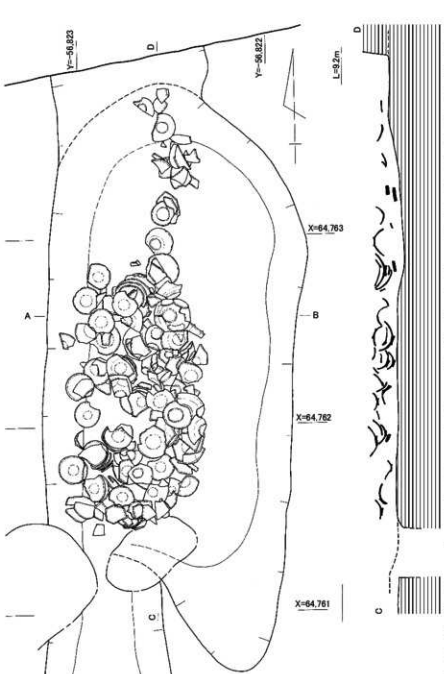


Fig.68 土坑 SK80 実測図（1/20）

陶器、近世陶磁器（混入遺物）がコンテナに11箱、瓦類が5箱出土した。約200個体の中国産青磁がまとまって出土しており、他に極く少量の白磁の優品が伴う。図示できなかった越州窯系青磁については法量表（198ページ）に示した。

725は土師器で、鉢か。726～728は定窯系白磁で、726は輪花口縁の碗、727・728は同一個体とみられる稜花口縁皿で、外底は露胎とする。

729～739は浙江省産の精製の越州窯系青磁の碗である。729～731は蛇の目高台の碗で、729・730は幅広の高台で全釉の優品である。731はやや幅が狭い蛇の目高台で、高台脇から外底は露胎。見込みに目跡がつく。732～734は低い輪状高台の碗で、全釉。見込みに整然と目跡が並ぶ。735・736は碗の口縁部片、737・738は輪花口縁になるとみられる碗で、全て全釉である。739は坏で、体下半～外底は露胎となる。

740～774は釉下に白化粧を施す粗製の越州窯系青磁である。740は小碗で、口縁が内湾する。741～748も小碗で、口縁が肥厚する。749～751は碗で、口縁は直線的に伸びる。751は外面に重ねた器物の付着物がある。752～757は輪花口縁の小碗、758～763は輪花口縁の碗である。764は釉下に白化粧を施す粗製品だが全釉で、輪状高台の輪花碗である。765・766は褐彩坏、767～771は輪花口縁皿

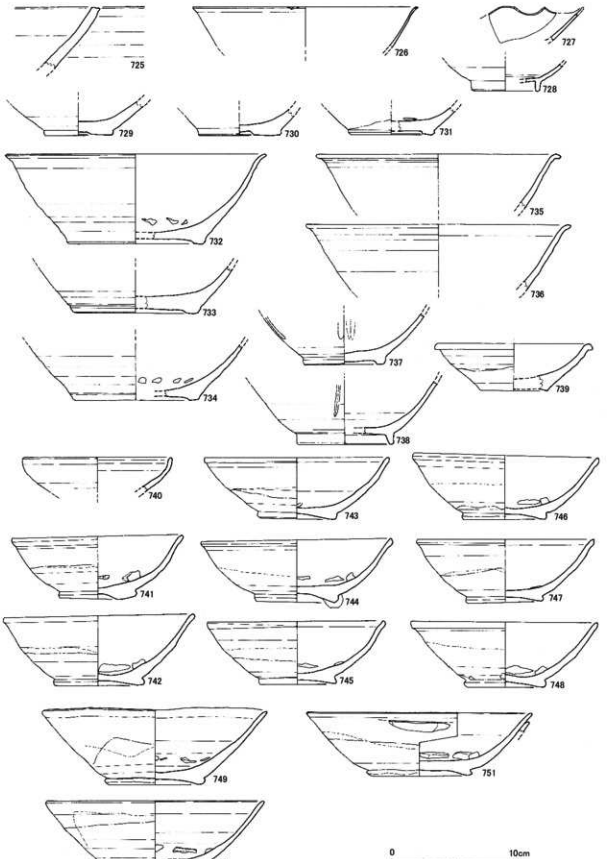


Fig.69 SK80出土遺物実測図1（1/3）

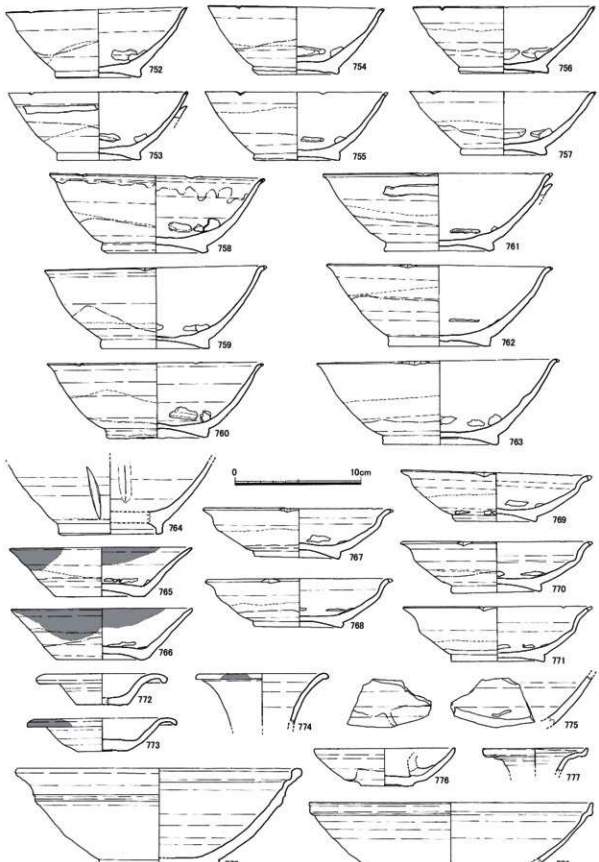


Fig. 70 SK80 出土遺物実測図 2 (1/3)

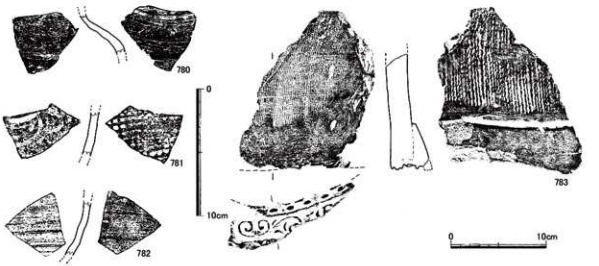


Fig.71 SK80 出土遺物実測図3（783 は 1/4、他は 1/3）

である。772・773は壷蓋。774は水注の口縁部片である。775は越州窯系青磁の碗で、胎土は精良だが陶質に近い。濃いオリーブ色釉を体外面下半を除き施釉する。見込みに赤褐色の目土が付着する。広東省産か。

776は福建省産褐釉陶器の灯盞である。777は施釉陶器の盤口壷で、内面のみに施釉する。778・779は福建省産無釉陶器の捏ね鉢である。

780～782は朝鮮半島産の無釉陶器である。780は頸部から肩部の破片で内外面横ナデ調整。781は外面格子目叩き、内面同心円の当て具痕。782は軟質で、外面は丁寧なヘラ削り、内面横ナデ調整。

783は軒平瓦で鴻臚館式（635型式）である。

まとまりのある一括遺物が出土しており、9世紀後半～10世紀初頭前後頃の遺構とみられる。

土坑ＳＫ８２ Fig.72・73、巻頭図版8、PL.9・10

第5次調査区の北東部、土坑SK80の南3mに位置する。礎石建物SB50の礎石据付穴2基を切っており、うち一つはSK82によって完全に消滅している。土坑SK83・SK90を切るが、この二つの土坑は一連の土坑の可能性がある。土坑SK85とSK100に切られ、土坑SK89との切り合いは不明である。南端部は近世の池SG51の掘り方により大きく破壊されている。平面プランは南北に細長い楕円形で、南北長は5.1mで更に南へと伸び、東西幅2.1mである。土坑北端はSB50の礎石据付穴を壊しつつも東へ迂回した平面形状になることから、土坑の掘削時にはまだ礎石が残っていて、これを避けたものと考えられる。断面形は逆台形で、底面は平坦で僅かに凹凸があり、深さ65～70cmを測る。

土坑内の土層は自然に埋没した状況を示しており、瓦類がまんべんなく出土するほか、⑤層中から中国産陶磁器が集中して出土した。完形品に近いものを中心に約50個体があり、いずれも二次的な火を受けており、目土がそのまま残る未使用品である。土坑SK38・SK56・SK61・SK80に類似する遺構であるが陶磁器の構成がやや異なっており、このSK82からは水注5個体がまとまって出土している。鴻臚館内における保管状況による差異を示すものかもしれない。また、土坑内から馬歯などの獣骨も出土しており、廃棄物を処理するための土坑として利用されたと考えられる。

ＳＫ８２出土遺物 Fig.74～77、Tab.10、巻頭図版8、PL.20・21

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、近世陶器（混入遺物）、貨幣（開元通寶）、獣骨等の自然遺物がコンテナに7箱、瓦類が25箱出土した。

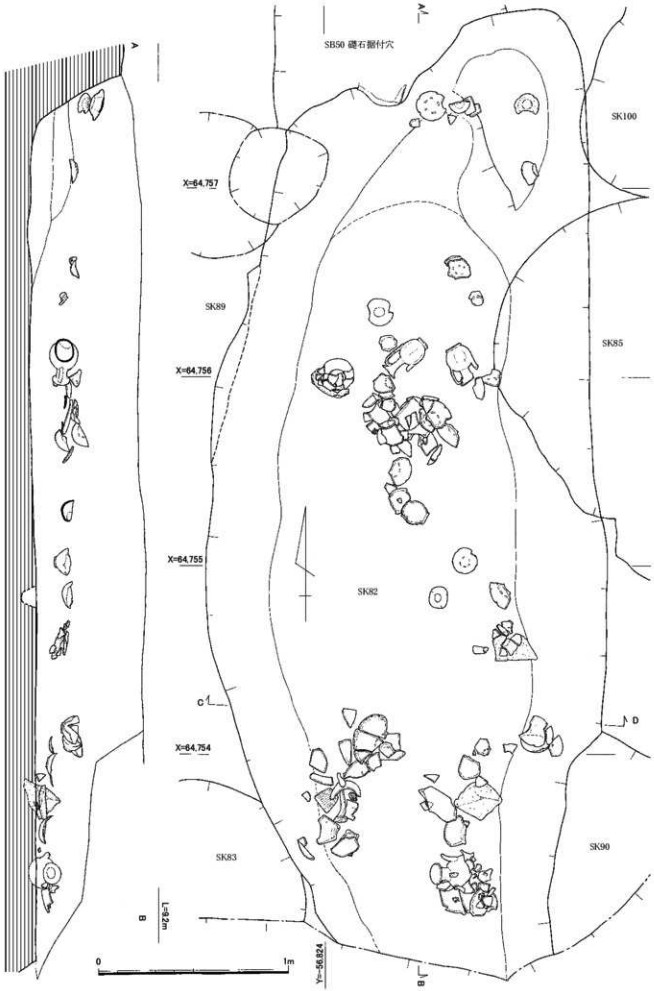


Fig.72 土坑 SK82 実測図 (1/20)

Fig.73 土坑 SK82 土層断面実測図（1/20）

越州窯系青磁がまとまって出土しており、図示できなかったものも含めて法量表（196ページ）に示した。

784は須恵器壷の底部、**788**は須恵器壷の胴部で、ともに猿投窯産とみられる。**785**は土師器坏で底部ヘラ切りである。口径12.0cm。器高3.2cm。**786・787**は土師器高坏もしくは鉢の脚とみられる。

789～792は邢窯系とみられる白磁だが、**789・791**は北宋早期の景徳鎮窯の可能性もある。**790**は小さめの玉縁口縁、**791**は蛇の目高台である。

793～832は越州窯系青磁で、**801**までは浙江省産の精製の越州窯系青磁である。**793～795**は蛇の目高台の碗で全釉である。**796**も蛇の目高台の碗だが、高台脇から外底は露胎である。**797**は低い輪状高台の碗で、高台脇から外底は露胎。見込みに目跡が整然と並ぶ。**798**は輪状高台の碗で、全釉。**799**は高めでやや先細りの輪状高台の輪花口縁碗で、全釉し畳付を釉剥ぎする。**800**は水注の口縁部で、把手がつく。**801**は水注の底部とみられ、全釉である。

802～832は釉下に白化粧を施し、体外面下半から外底を露胎とする福建省産の粗製の越州窯系青磁である。**802～805**は円盤状高台内に削りを加え、蛇の目高台風とする碗である。**806～808**は直口縁の碗である。**809～811**は小碗で、口縁が端部でやや肥厚する。**812・813**は口縁が内湾する小形の小碗である。**814～817**は輪花口縁となる小碗、**818～822**は同じく輪花口縁の碗で、822は外底に墨書があるが判読不明である。822は目土を除去する際に、見込みの釉も輪状に剥ぎ取られている。**823・824**は輪花口縁皿で、824は見込みに粗い白土目が残る。**825**は褐彩坏で、やはり見込みに粗い白土目が付着する。**826**は壷の蓋で、口縁部に穿孔する。口縁下端から内面に施釉する。**827**は大型の合子で、体外面下半から外底は露胎である。見込みと受け部に目跡がつく。内部に小形品を入れて焼成したのであろう。**828～832**は水注で、一部が欠けるものもあるが、いずれも完品に近い。**828・829**は胴外面の6ヶ所にヘラ押しして瓜状とする。**830～832**は褐彩を施す（アミで図示した部分）。これらの水注は、いずれも釉下に白化粧を施し、口縁内面から体下半にかけて釉を施している。829は底部のみ素地が異なり、砂粒を多く含む粗い粘土を用いている。また、828・829は胴外面の側面側に目土が付く。焼成時の熔着防止のためであろう。

833は褐釉陶器の灯盞で、灯台が残る。**834**は褐釉陶器の双耳壷。**835**は福建省産無釉陶器の鉢。

836・837は朝鮮半島産の無釉陶器である。**836**は壷の口縁で横ナデ。**837**は軟質の胴部片で、外面に突線2条を巡らす。内外面横ナデ調整で、内面に不鮮明な当て具痕が残る。

838は鴻臚館式軒丸瓦（223型式）。**839**も軒丸瓦で082A型式。**840**は鴻臚館式軒平瓦（635型式）。**841**は面戸瓦で、凸面の叩きは縄目でナデ調整する。**842・843**は素文磚の小片である。

844は銅銭で、エックス線撮影により「開元通寶」と判読される。初鋳年は621年である。

9世紀後半～前半の遺構とみられる。

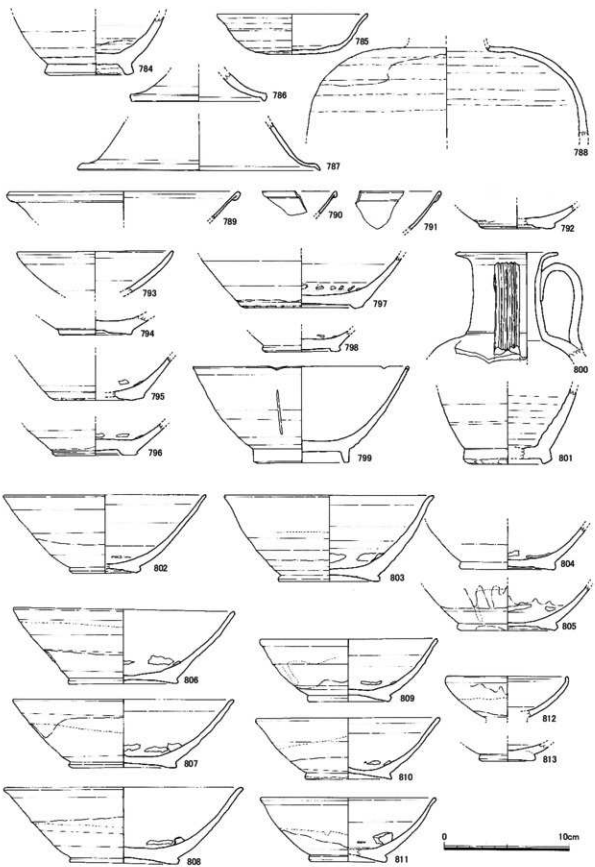


Fig.74 SK82 出土遺物実測図1 (1/3)

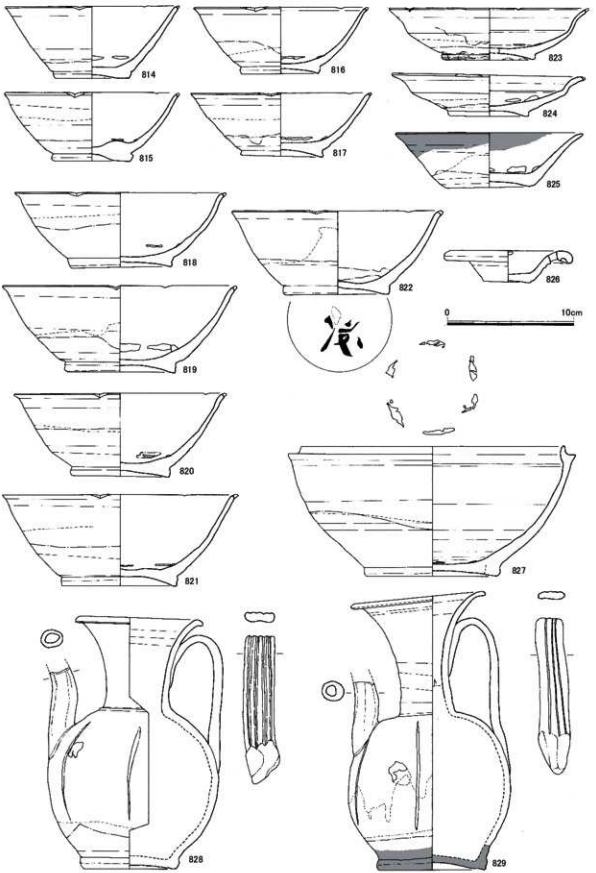


Fig.75 SK82 出土遺物実測図2 (1/3)

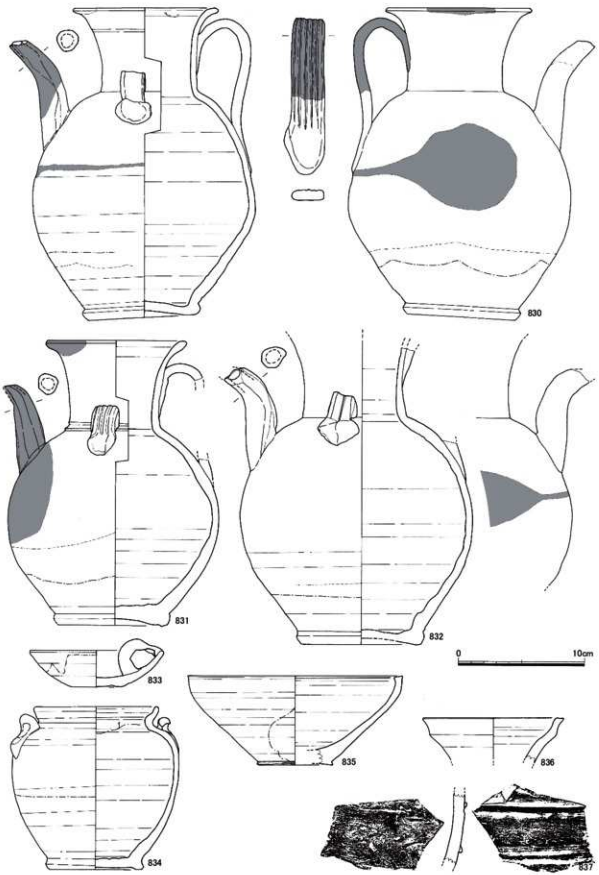


Fig.76 SK82 出土遺物実測図3 (1/3)

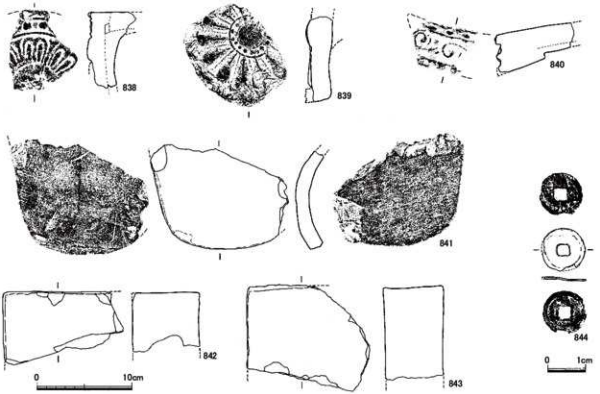


Fig.77 SK82 出土遺物実測図4（844は1/2、他は1/4）

土坑ＳＫ８３・９０ Fig.78

第5次調査区の東端付近に位置し、SK82に間を切られているが、SK83とSK90は一連の土坑の可能性がある。ともに南側を近世池SG51により大きく破壊され、遺構の残りが悪い。隅丸方形の平面プランとみられ、二つの土坑の東西全長は3.1mを測る。南北長は不明だが1m以上になる。断面逆台形をなし、深さは40cm前後で、SK90の底面レベルが僅かに高いが、連続すると考えても不自然ではない。

土坑ＳＫ８３・９０出土遺物 Fig.80、PL.21

SK83は越州窯系青磁2点と瓦がコンテナ1箱出土したが、いずれも小片で、図示できるものはない。

SK90は越州窯系青磁・朝鮮半島産陶器・須恵器壷が少量と、瓦がコンテナ2箱出土した。

Fig.80の886は朝鮮半島産無釉陶器の壷である。口縁外面に突線1条を巡らし、頸部外面に平行叩き後横ナデ調整する。外面に黒色顔料を塗布しているとみられる。

887は墨書磚である。表面に習字及び人物の頭部らしき絵画を描き、背面に婦人・馬などの絵画を描いている（PL.21参照）。

土坑ＳＫ８４ Fig.78

第5次調査区の西半部に位置し、北側をSK56に切られる。南北に長い不整楕円形プランで、南北長1.2m以上、東西長0.95mである。断面逆台形で、深さ20cm。底面は平坦である。

ＳＫ８４出土遺物 Fig.79

須恵器、越州窯系青磁、朝鮮半島産陶器が極く少量、瓦がコンテナ2箱出土した。

845は朝鮮半島産の無釉陶器で、平底である。体部の立ち上がりはやや丸みを持つ。内外面とも横ナデ調整する。

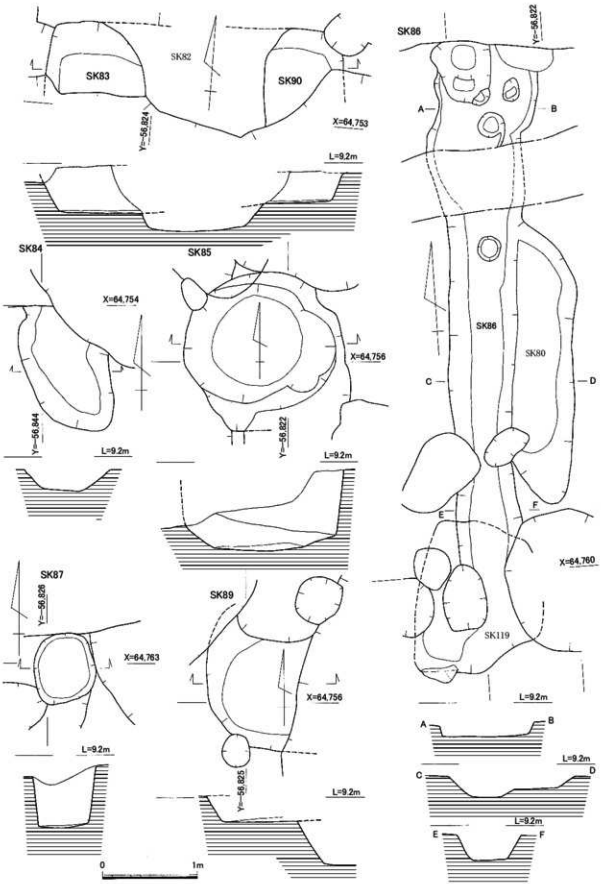


Fig.78 土坑 SK83・84・85・86・87・89・90 実測図 (1/40)

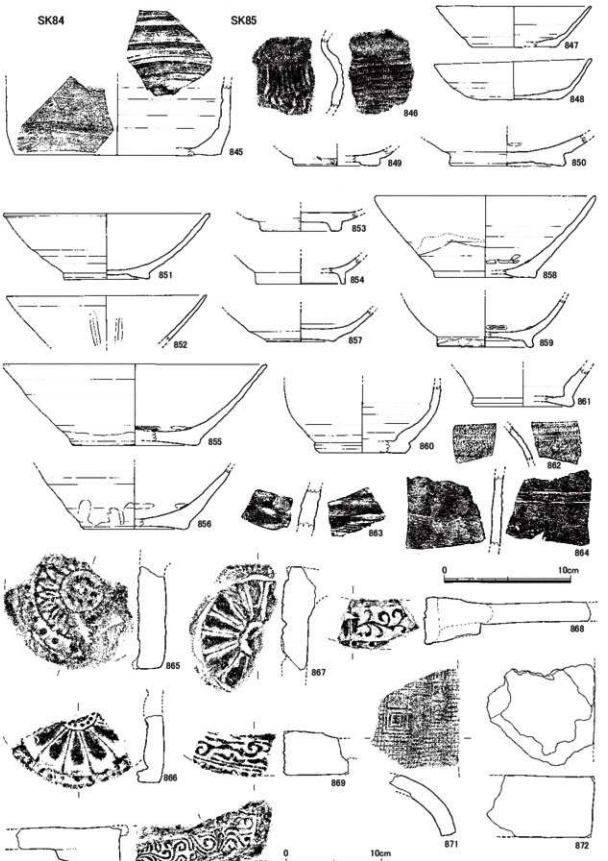


Fig.79 SK84・85 出土遺物実測図（845 ～ 864 は 1/3、他は 1/4）

土坑ＳＫ８５ Fig.78

第5次調査区北半の東端に位置し、土坑SK82とSK98を切る。不整な円形プランで、南北長1.65m、東西長1.7mである。壁がほぼ垂直に落ち、下位で屈曲して円形の底面へ到る。底面は径0.95mの円形をなす。深さ85cmである。

ＳＫ８５出土遺物 Fig.79、PL.21

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系・長沙窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器がコンテナ1箱、瓦が16箱出土した。

846～848は土師器である。**846**は玄界灘式製塩土器で、胴部外面に平行叩き、内面に平行当て具痕がある。頸部内外面横ナデ。**847**は坏で復元口径12.2cm、器高3.2cm。**848**も坏で底部ヘラ切り、口径12.5cm、器高3.0cm。

849・850は蛇の目高台の白磁碗で、849は高台脇に挟み具痕がある。850は見込みに目跡がある。

851～861は越州窯系青磁である。**851～856**は精製の碗で、**851**は蛇の目高台で優品。**852**は体外面にヘラ押しで縦線を入れる。**853・854**は輪状高台で全釉。**855・856**は円盤状高台で外底は露胎とする。見込みには目跡がつく。**857**は精製の稜花口縁皿で全釉、畳付は釉剥ぎする。**858～860**は粗製の越州窯系青磁で、釉下に白化粧を施す。**858**は口縁が真っ直ぐ開く碗で、見込みに粗い白土目が付く。体外面下半から外底は露胎である。**859**は輪状高台の碗で、見込みに目跡が残る。高台脇まで施釉する。**860**は壺で、内面露胎。**861**も粗製の越州窯系青磁の壺類で、内面は露胎である。

862～864は朝鮮半島産の無釉陶器で、内外面横ナデ調整。**862**は外面に沈線1条が巡り、内外面に黒色顔料を塗る。**863**は外面に黒色顔料を塗る。**864**は外面に沈線2条が巡る。

865～867は軒丸瓦である。**865**は143型式、**866**は082A型式、**867**は082B型式である。**868～870**は軒平瓦である。**868**は663型式、**869**は771型式、**870**は662型式である。**871**は丸瓦片で、「大国」の文字瓦である。**872**は素文磚の小片である。

土坑ＳＫ８６ Fig.78

第5次調査区の北東隅に検出した溝状に細長く伸びる土坑である。礎石建物SB330の礎石据付穴を切る。北端は調査区外へ伸び、南端は土坑SK119と切り合う部分で消滅している。SK119との切り合い関係は不明。土坑SK80と重複するが、SK80の項でも述べたように覆土に明確な切り合いは認められず、またSK86底面からSK80底面にかけて連続して一括遺物である中国産陶磁器が広がって出土することから、SK86とSK80の間には大きな時期差はないと考えられる。北端がやや乱れた平面形となるが、南北長5.5m以上、東西幅1.1～0.6mを測る。横断面形は逆台形をなし、深さ15～25cmで南へ深くなるが、底面自体の比高差はほとんどない。礎石の間をぬって掘られた土坑であろう。

出土遺物としては瓦がコンテナ1箱あるが、図示できるような遺物はない。

土坑ＳＫ８７ Fig.78

第5次調査区の北東部分でSK66と接し、SK81と重複するが、切り合いは不明瞭。南北に僅かに長い円形プランをなす。南北長0.75m、東西長0.65m。断面逆台形で、深さ65cm、底面は平坦である。

ＳＫ８７出土遺物 Fig.80

須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁）、瓦、鉄製品がコンテナ2箱出土。

873～879は越州窯系青磁である。**873**は精製の碗で口縁が内湾する。輪状高台で、見込みに段が付く。全釉で畳付は釉剥ぎ。見込みに目跡が付き、高台に白土目が付着する。**874～879**は優品の壺類の

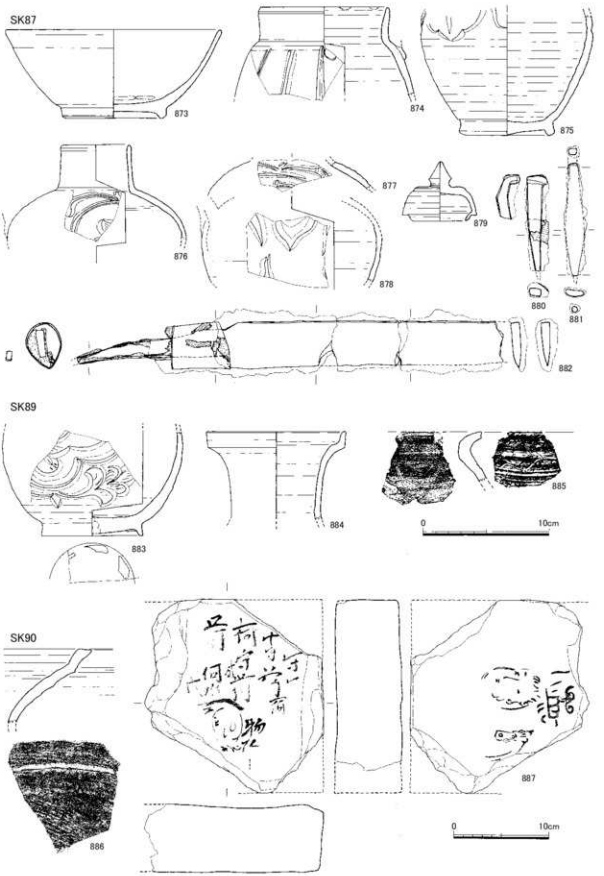


Fig.80 SK87・89・90 出土遺物実測図（887 は 1/4、他は 1/3）

破片である。874は広口の壷で外耳が付く。外面の口縁端部と頸部に沈線1条を巡らし、体部に2本一組の片切彫りで縦線を施す。胎土はきめ細かく、やや黄味のある透明釉を全体に施す。口縁内面に白色の目土が残る。875も壷で、胎土・釉調は874に酷似する。体部下半に回転ヘラ削りを施し、体部上半に片切彫りによる草花文を施す。全釉で、高台畳付に目跡がつく。876～878は接合しないが同一個体とみられる水注で、874に比べ胎土は僅かに灰味が強く、釉も僅かに濃いめであるが、近似する。口縁は僅かに内傾して直に立ち、878には注口の一部が残る。口縁端部に沈線を1条巡らし、体部外面に片切彫りにより花文を施す。全釉。879は蓋で、宝珠状の鈕が付く。外面のみ施釉し、受け部に目跡がつく。胎土・釉調は876等の水注に近似し、図上復元による口径も一致する(内径3.3cm)。

880～882は鉄製品である。880は釘で断面方形をなし、頭頂部が曲がる。881は鏃もしくはタガネか。882は刀で、先端を欠失する。茎に環状の鋲具と木質が残る。刃部残存長22cm、刀茎長11.9cm。

第Ⅴ期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

土坑ＳＫ８９ Fig.78

土坑SK82の西側に重複するが、SK82との切り合い関係は明瞭でない。SK89は円形プランの土坑で、南北長1.4m以上、東西長は不明である。断面逆台形で、深さ25cm。底面は平坦である。

ＳＫ８９出土遺物 Fig.80

土師器、須恵器、中国産陶磁器(景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器)、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ4箱出土した。

883は北宋前期の越州窯系青磁の水注で、体外面に片切彫りで施文する。全釉で高台内側に目跡がつく。884は福建省産無釉陶器の壷である。885は朝鮮半島産の無釉陶器で、外面に波状文を施す。

第Ⅴ期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

土坑ＳＫ９１・９８ Fig.81、PL.11

第5次調査区の東壁際に位置する土坑である。SK91は礎石建物SB50の礎石据付穴を切り、土坑SK98と重複するが切り合い関係は不明確。東側は調査区外へ伸び、南側は近世池SG51に切られる。隅丸方形プランで、南北長1.7m、東西長は1.2m以上。断面逆台形で、深さ25cm。底面は平坦である。SK98はSK91の北西側に重複する遺構で、大半が土坑SK85に切られ、平面プランや規模は不明である。深さ35cmで、底面平坦である。

ＳＫ９１出土遺物 Fig.82、PL.21

土師器、須恵器、中国産陶磁器(景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁)、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナ2箱出土した。

888は景徳鎮窯産の白磁皿である。889～894は越州窯系青磁である。889は精製全釉の皿で高台畳付は釉剥ぎする。890は円盤状高台に削りを入れて蛇の目高台風とする碗で、外底露胎。891～893も碗で、体外面下半以下を露胎とする。891の見込みの白土目には重ね焼きした上物の高台の痕跡が残り、892・893は釉下に白化粧を施す。894は壷で、両肩に円筒状の耳が付く。肩部外面に褐彩を施す。895は朝鮮半島産の無釉陶器で、内外面とも横ナデ調整。

出土土器が少量で詳細時期不明である。

ＳＫ９８出土遺物

土師器、須恵器、中国産陶磁器(景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁)、瓦がコンテナ3箱出土したが、図化できる遺物はない。明代の龍泉窯系青磁が混入して出土している。

土坑ＳＫ９２ Fig.81

第5次調査区北東部の大型土坑SK75の北側に隣接し、SK75に切られる。西側にも土坑が重複するが、切り合いは不明。楕円形プランの土坑とみられ、南北長1.1m以上、東西長1.3m。断面逆台形で、深さ60㎝、底面が北から南へ傾斜する。

ＳＫ９２出土遺物 Fig.82

土師器、中国産陶磁器（景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、ガラス製品が少量、瓦がコンテナ2箱出土した。

896は玉縁口縁の白磁碗である。**897**は輪花口縁とみられる白磁皿である。**898・899**は越州窯系青磁の碗である。輪状高台で、全釉。高台畳付を釉剥ぎし、見込みに白土目が整然と並ぶ。**900**は輪花口縁皿で全釉。**901**は朝鮮半島産陶器の底部で、SK93出土の906と接合する。

902はガラス小玉で、連結製作の痕跡を残している。

土坑ＳＫ９３ Fig.81

土坑SK92の東に隣接する土坑で、SK75に切られる。SB330の礎石据付穴を切る。不整な隅丸方形プランで、南北長1.1m以上、東西長1.1m。断面逆台形で、深さ30㎝。底面は平坦である。

ＳＫ９３出土遺物 Fig.82

土師器、中国産陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器がコンテナ1/2箱、瓦が1箱出土した。

903は越州窯系青磁坏で、精製品だが体外面下半から外底は露胎である。口縁端部を釉剥ぎする。**904・905**は福建省産施釉陶器の四耳壺で、SK75出土品と接合する。**906**は朝鮮半島産陶器で901と接合する。外面格子目叩きで下半にヘラ削りする。内面ナデ調整。アズキ色を呈する。

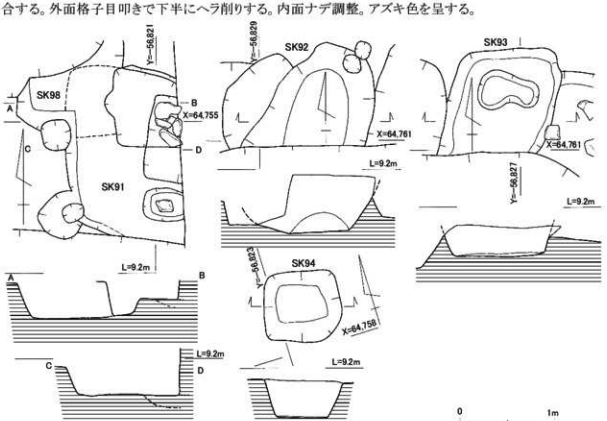


Fig.81 土坑 SK91・92・93・94・98 実測図（1/40）

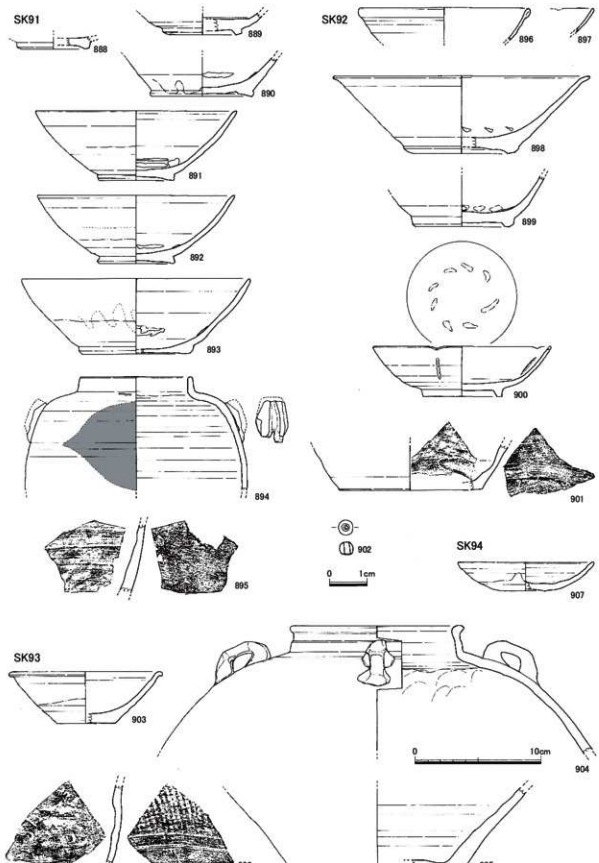


Fig.82 SK91・92・93・94 出土遺物実測図（902 は 1/1、他は 1/3）

土坑ＳＫ９４ Fig.81

大型土坑SK82の北に隣接する小土坑である。東西に長い隅丸長方形プランで、東西長0.8m、南北長0.75m。断面逆台形をなし、深さ40cm。底面は0.5×0.4mの隅丸長方形をなし、平坦である。

ＳＫ９４出土遺物 Fig.82

須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・定窯系白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器が少量と、瓦がコンテナ1箱出土した。

907は福建省産褐釉陶器の灯盞である。底部糸切りで、体外面下半は露胎とする。

土坑ＳＫ９５ Fig.83

第5次調査区中央の北端付近に位置する瓦溜りである。北側は攪乱に切られている。楕円形プランの

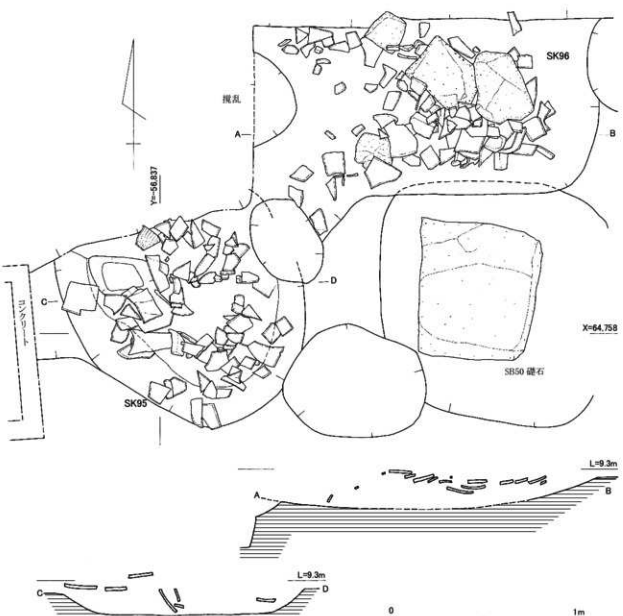


Fig.83 土坑 SK95・96 実測図（1/20）

土坑で、南北長1.15m以上、東西長1.2m。断面皿状をなし、深さ15cm。土坑内には多数の瓦を含む。底面の北西寄りに深さ10cmの浅い方形の窪みがある。

ＳＫ９５出土遺物 Fig.84

須恵器の甕が出土したほか、瓦がコンテナ1箱出土した。

908は鴻臚館式軒平瓦(635型式)である。

Fig.84 SK95 出土遺物実測図 (1/4)

土坑ＳＫ９６ Fig.83

SK95の北東に隣接するが、SK95との間にピットがあり切り合いは不明である。南東側に礎石建物SB50の礎石があり、僅かに礎石据付穴を切っている。礎石群を避けて掘られた瓦溜りと考えられる。北側はSB50の雨落ち溝と重複するが、覆土が近似しておりSK96との境が不明瞭であった。隅丸方形プランをなす土坑で、南北長0.95m以上、東西長1.85m以上となる。浅く皿状に窪み、深さ20cm。土坑内には多量の瓦と自然礫が投棄されていた。

土器類は出土していない。瓦がコンテナ2箱出土した。

土坑ＳＫ９７ Fig.85

第5次調査区北端中央部の壁際に位置する土坑である。北側は調査区外に伸びる。楕円形プランで、東西長0.73m、南北長0.5m以上。円筒状に垂直に落ち込んでおり、深さ50cmが残る。底面は平坦な円形を呈する。土坑内には、径50cm以上の礫が落ち込んでおり、SK62と同様、礎石建物の廃絶後に礎石等を片づけるために掘った土坑の可能性もあろう。

ＳＫ９７出土遺物 Fig.86

土師器、中国産陶磁器(越州窯系青磁)がコンテナ1/2箱出土した。

909～913は越州窯系青磁である。909・910は碗で、全釉。輪状高台の畳付を釉剥ぎする。909の見込みには、高台径よりも一回り小さい環状の目跡があり、小形品を重ね焼きしたとみられる。911は小坏で平底。体部が内湾する。全釉で、底部縁辺に目跡が付く。912は皿で全釉。輪状高台で畳付は釉剥ぎする。見込みの目跡は細長い形状をなす。913は蓋で、遺構図に示した位置から出土した。扁平な宝珠状鈕が付き、天井部と体部の境に高台状の突起を巡らせる。全釉で、受け部は釉剥ぎする。

出土遺物が少ないが、9世紀後半頃の遺構の可能性もある。

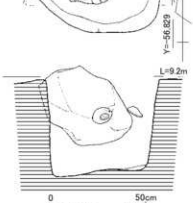


Fig.85 土坑 SK97 実測図 (1/20)

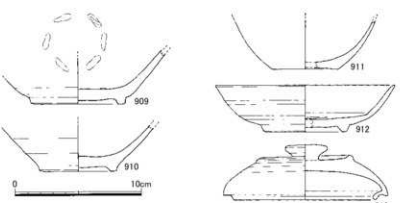


Fig.86 SK97 出土遺物実測図 (1/3)

土坑ＳＫ９９ Fig.87

第5次調査区北半の中央部、SK55の東側に位置する小土坑である。SK107を切る。円形プランをなし、南北長0.9m、東西長0.8mである。断面逆台形を呈し、深さ30cm。底面から浮いた状態で礫が数点出土した。

ＳＫ９９出土遺物 Fig.88

中国産陶磁器（景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁）、朝鮮半島産陶器が少量出土した。

914は景徳鎮窯白磁皿で、体部に外からのヘラ押しを加えて輪花とする。

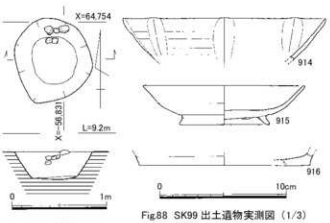


Fig.87 土坑 SK99 実測図 (1/40)

Fig.88 SK99 出土遺物実測図 (1/3)

915は越州窯系青磁皿である。貼り付け高台で、全釉。目跡は外底の中央寄りに付く。

916は朝鮮半島産の陶器で平底である。横ナデ調整で、内面に一部黒色顔料が付着している。胎土がアズキ色に発色する。

出土遺物より、第Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）の遺構とみられる。

土坑ＳＫ１００ Fig.89、PL.11

第5次調査区の東端に検出した土坑である。土坑SK82を切り、SK85に切られている。東側は第6次調査区との境にかかる。東西にやや長い不整な円形プランをなし、東西長1.6m以上、南北長1.6m。断面逆台形で、深さ30cm。底面は平坦である。瓦類、土器類とともに、馬歯などの獣骨や炭化物が出土しており、廃棄物の処理用土坑と考えられよう。

ＳＫ１００出土遺物 Fig.90～92

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・定窯系白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器がコンテナ4箱、瓦がコンテナ9箱の他、獣骨等が出土した。

917は須恵器の長頸壷である。口縁の内面と肩部の外面に自然釉を被る。918は須恵器甕の口縁部小片で、横ナデ調整。外面に叩き痕が僅かに残る。919～925は土師器甕である。919は胴部外面刷毛目調整、口縁横ナデ。内面は器面が剥落する。920は器面が荒れており、指押え痕が内外に残るのみである。921・922は胴外面に平行叩きを施す。内面ナデ調整か。口縁は横ナデする。923～925は外面に長方形の格子目叩きを施し、内面はヘラ削りを加える。926・927は黒色土器A類の壷で、口縁が短く外反して開く。926は頸部から胴部の内面に手持ちヘラミガキを施す。外面は磨滅が著しいが横ナデ調整か。927は口縁から胴部上半の内面にミガキ状の丁寧な横ナデを加え、下半は指押え後ナデ調整。胴外面は板状の工具を用いたナデ調整を施す。

928～940は精製の越州窯系青磁である。928は蛇の目高台の碗である。高台はやや幅が狭く、高台脇

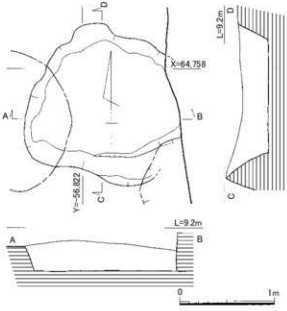


Fig.89 土坑 SK100 実測図 (1/40)

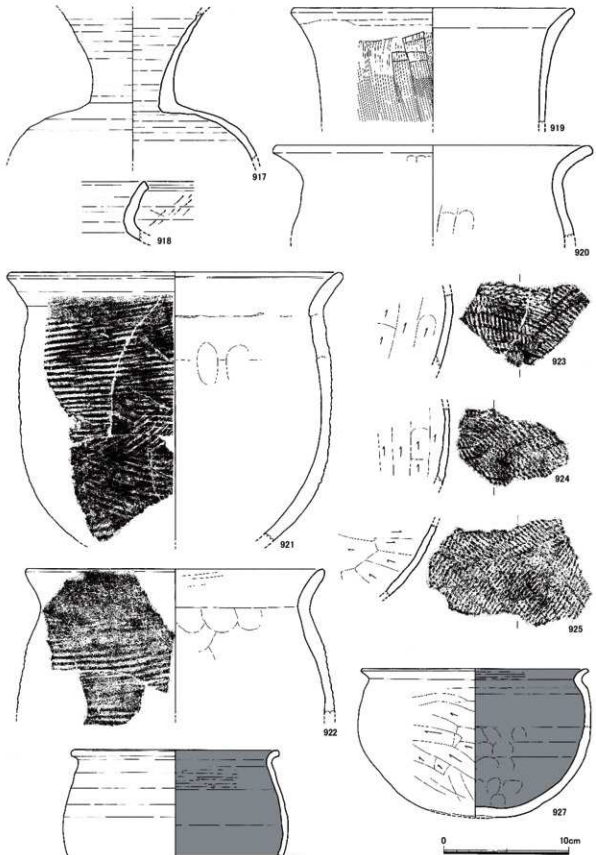


Fig.90 SK100 出土遺物実測図1（1/3）

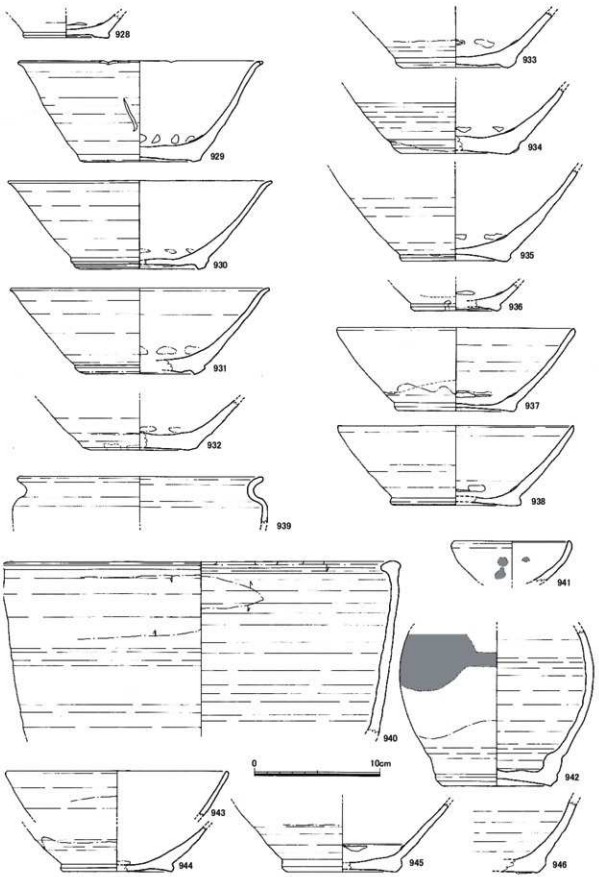


Fig.91 SK100 出土遺物実測図2（1/3）

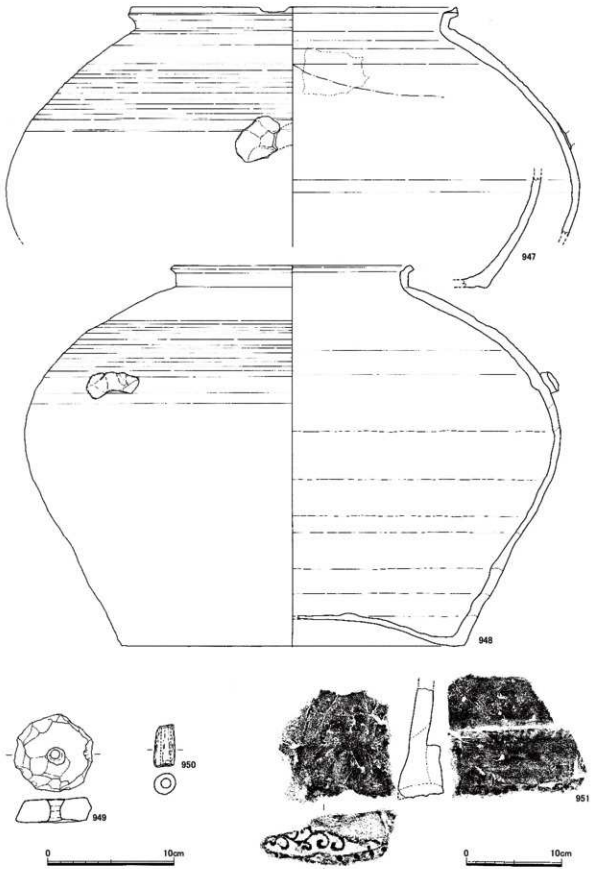


Fig.92 SK100 出土遺物実測図3（951 は 1/4、他は 1/3）

から以下は露胎である。畳付に目跡が付き、見込みには白土目が付着する。929～935は精製の越州窯系青磁碗で、929～932と933～935では胎土・釉調に差異がある。929～931は全釉、932～935は体下半ないし高台以下は露胎である。936～938は粗製の越州窯系青磁で、釉下に白化粧を施し、体下半以下は露胎とする。見込みには白土目が付着する。底部は円盤状の高台で、936は削りを加えて蛇の目高台風とする。939は精製の広口壺で、内面まで施釉する。940は精製の鉢で、口縁外面から内面にかけて施釉するが、全て剥落している。口縁端部は釉剥ぎしており、目跡が付く。942は粗製の越州窯系青磁の壺で、体外面下半まで施釉。釉下に白化粧と褐彩を施している。

941は灰釉陶器の灯盞か。斑状に褐釉が散っているが、釉下彩かどうかは不明。

943～946はいわゆる越州窯系青磁の範疇であるが、胎土・釉調が他と異なっており、広東産の可能性もある。底部に回転ヘラ削りを加える。943～945は碗である。943・944は同一個体の可能性がある碗である。体外面下半から外底を露胎とし、露胎部分が赤変する。畳付と見込みに大きな楕円形の目跡がある。945は碗か。見込みに沈線が巡る。釉の大半は剥落するが、体外面下半以下は露胎であろう。946は大鉢である。外面露胎で、底部に目土が付着する。

947・948は朝鮮半島産の陶器で、いずれも高麗期の大型の広口壺である。947は同一個体と思われる底部があるが接合しない。頸部と肩部の境を段で分け、頸部は短く立ち上ち上がり、口縁は外反する。口縁端部は尖り気味で、内側に平坦面をつくる。胴中位よりやや上に横耳が対称に二つ付けられ、対応する口縁端部にくり込みが設けられている。横耳の部分に沈線2条が、その上位の肩部外面に凹線15条が巡る。胴外面から口縁内側にかけて黒色顔料が塗られている。948は上げ底の平底をなし、胴部は扁平で、頸部は短く直立する。口縁は外反し、口縁内側に凹線1条を巡らす。胴部中位よりやや上に横耳が付く。横耳は本来5個あったものとみられる。肩部外面には多条の凹線を巡らせる。全体に黒色顔料が塗られており、肩部外面と内底に自然釉がかかる。全体に火ぶくれ状の瘤が多数認められる。

949は土製の紡錘車あるいは遊具か。甑など孔の開いた土器を打ち欠いて製作したものみられる。950は土錘である。

951は軒平瓦で663型式。凹面・凸面ともナデ調整しており、タタキ目は残らない。

第Ⅳ期(9世紀後半～10世紀前半)の遺構である。

土坑SK103・104・107 Fig.93、PL.12

第5次調査区北半部の中央に位置する瓦溜りである。礎石建物SB50の礎石の間の広い範囲に瓦が堆積しており、掘り下げた結果、底面において3基の土坑が重複する状況であることが分かった。

SK103はSB50の礎石2間分以上にわたり東西方向に細長く掘られた土坑で、掘り方平面形は礎石を避けた形状をなすが、明らかに礎石の据付穴を切っている。隅丸長方形プランで、東西長7.0m、南北幅1.7mを測る。南西部と北西部は攪乱坑に切られている。断面形は浅い皿状をなし、深さ15cmで、内部には瓦がぎっしり詰まっている。

SK104はSK103の南東側に一部重複して隣接する土坑であり、不整楕円形プランで、南北長1.7m、東西長1.35m。浅い窪みで、深さ10cmである。瓦が密集して堆積しており、SK103と瓦の境目を区分することが難しい。

SK107はSK103・SK104の南東側に連続する溝状に細長い土坑である。礎石を避けるが、据付穴を掘削して、礎石の際まで瓦を埋め込んでいる。南側は近世池SG51に切られており、南北長3m以上、東西幅0.7m以上である。断面逆台形で、深さ20cm。瓦が密集して出土し、やはりSK103・SK104と明確に区分することは困難であった。

ＳＫ１０３出土遺物　Fig.94

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系・景徳鎮窯白磁、越州窯系青磁、陶器）が少量、瓦がコンテナ20箱出土した。

952は景徳鎮窯の白磁碗で、外からのヘラ押しにより輪花口縁とする。

953は越州窯系青磁の小碗である。口縁が緩やかに外反する。**954**は越州窯系青磁合子である。体外面に縦方向のヘラ彫りを施す。全釉で、受け部に目跡が付く。

Fig.93　土坑 SK103・104・107 実測図（1/40）

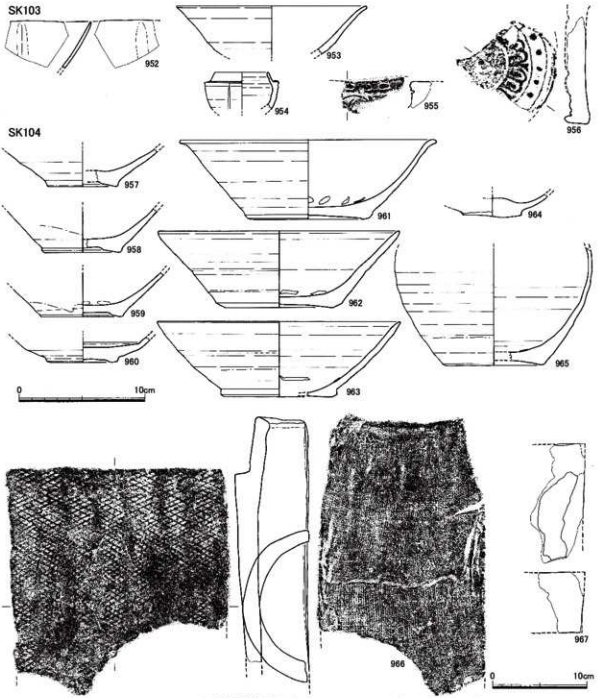


Fig.94 SK103・104出土遺物実測図（955・956・966・967は1/4、他は1/3）

955は軒平瓦で、小片だが鴻臚館式軒平瓦(635型式)であろう。956は軒丸瓦で、磨滅が著しいが鴻臚館式(223型式)か。

第Ⅴ期(10世紀後半～11世紀前半)の遺構であろう。

ＳＫ１０４出土遺物 Fig.94

土師器、須恵器、中国産陶磁器(越州窯系青磁、陶器)がコンテナ1/2箱、瓦が5箱出土した。

957～963・965は越州窯系青磁である。957～959は蛇の目高台の碗で、957は全体に施釉し、958・

959は体外面下半から外底を露胎とする。959は見込みに目跡が付く。960は稜花口縁皿か。見込みに段が巡り、全釉で畳付を釉剥ぎする。961は碗で、口縁が外反し、底部は極めて低い削り出し高台である。全釉で、見込みに20個の白土目が整然と並ぶ。962は平底碗で、口縁は直線的に開く。体外面下半以下は露胎である。見込みにやや粗い白土目が残る。963は粗製の円盤状高台の碗で、釉下に白化粧を施している。体外面下半以下は露胎である。965は越州窯系青磁の壷で、底部周辺は露胎。内底に白土目が付いており、小物を内部にいれた状態で焼成したものと考えられる。

964は福建省産褐釉陶器で、灯盞か。外底は露胎である。

966は丸瓦で、凸面に単線の斜格子目叩きを施す。967は素文磚の残欠である。

ＳＫ１０７出土遺物

中国産陶磁器（越州窯系青磁）が少量、瓦がコンテナ2箱出土した。また獣骨が出土している。しかしながら、図示できるようなものはない。

土坑ＳＫ１０５ Fig.95、PL.12

第5次調査区の中央部東寄りに検出した土坑である。南側を近世池SG51に大きく破壊され、他の部分も近世土坑等により破壊を受ける。礎石建物SB50と重複する位置にあるが、建物に関連する遺構との直接の切り合いはない。南北にやや長い隅丸長方形プランをなし、南北長1.6m以上、東西幅1.2mを測る。断面はすり鉢状をなし、深さ50cm。土坑の底面に接して、四耳壷1個体が横倒しに割れた状態で出土している。

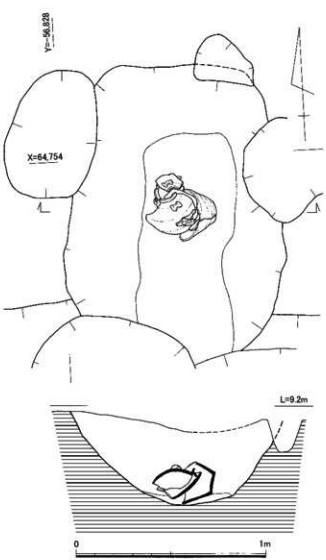


Fig.95 土坑 SK105 実測図（1/20）

ＳＫ１０５出土遺物 Fig.96、PL.21

土師器、須恵器、中国産陶磁器（邢窯系白磁、越州窯系青磁、陶器）、朝鮮半島産陶器、瓦がコンテナにして合わせて10箱出土した。

968～971は朝鮮半島産の陶器である。968・969は同一個体とみられる壷で、胴外面に格子目叩きを施し、内面は横ナデ調整する。口縁内外面横ナデ調整で、外面に櫛描波状文を巡らせる。胴部外面に断面台形の突帯を貼り付け、横ナデ調整を加える。口縁外面に自然釉がかかる。970は二重口縁の壷で、横ナデ調整。971は肩部付近の小片で、横ナデ調整。外面に沈線1条を巡らせる。

972は中国産陶器の大型の四耳壷で、遺構図に示した状態で出土した。底部は僅かにあげ底の平底で、長胴で肩が張り、胴部最大径

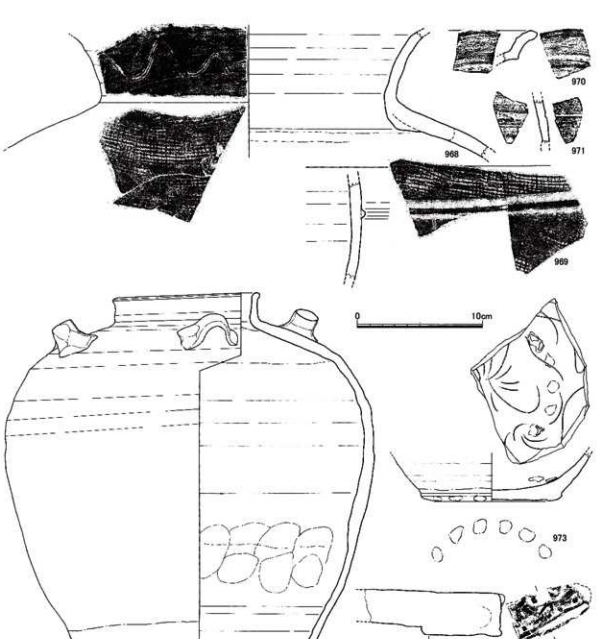


Fig.96 SK105 出土遺物実測図（974 は 1/4、他は 1/3）

は上位にある。頸部は直立し、口縁はやや肥厚する。外面は横ナデ調整で、内面にロクロ目がよく残るが、胴部内面中位には指押え痕が残る。化粧土は認められず、口縁内面から胴外面下半まで薄く釉がかかるが、ほとんど剥落しており、施釉か自然釉か不明確である。

973は越州窯系青磁の碗で、削り出しによる低い輪状高台が付く。見込みには毛彫りで草花文を施す。高台脇から外底は露胎で、畳付と見込みに目跡が付く。